

国際芸術祭「あいち」組織委員会 運営会議

次 第

日時：2025 年 5 月 16 日（金）

午後 2 時 30 分から

場所：国際芸術祭「あいち」

組織委員会事務局内

1 開 会

2 議 事

報告事項

国際芸術祭「あいち 2025」企画概要の全容について

3 閉 会

<配付資料>

資料：国際芸術祭「あいち 2025」プレスリリース（2025 年 5 月 30 日）について

国際芸術祭あいち2025

灰と薔薇のあいまに

Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses
9.13–11.30.2025

プレスリリース—2025年5月30日



Copyright © 2025 Daiichi Igami. All Rights Reserved.

愛知芸術文化センター
Aichi Arts Center

愛知県陶磁美術館
Aichi Prefectural Ceramic Museum

瀬戸市のまちなか
Seto City

国際芸術祭「あいち」組織委員会
Aichi Triennale Organizing Committee

「あいち」の国際芸術祭

2010年から3年ごとに開催されており、今回で6回目を迎えます。国内最大規模の国際芸術祭の一つであり、国内外から多数のアーティストが参加します。愛知芸術文化センターのほか、県内の都市のまちなかにも広域に展開します。現代美術を基軸とし、舞台芸術なども含めた複合型の芸術祭で、ジャンルを横断し、アートの多様性を「あいち」から発信します。

開催目的

- ・ 新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・ 現代美術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・ 文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

目次

P. 3	開催概要
P. 4	会場
P. 5	みどころ
P. 6-9	テーマ／コンセプト
P. 10-11	企画体制
P. 12-37	参加アーティスト
P. 37	国際芸術祭「あいち2025」巡回展示「ポップ・アップ！」
P. 38-39	会場別作家一覧
P. 40-41	ラーニング
P. 42-43	連携事業
P. 44-45	キービジュアル、デザイン
P. 46-47	アクセス、現代美術展チケット情報

開催概要

名称	国際芸術祭「あいち2025」 Aichi Triennale 2025
テーマ	灰と薔薇のあいまに A Time Between Ashes and Roses
芸術監督	フール・アル・カシミ Hoor Al Qasimi [シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター／国際ビエンナーレ協会(IBA)会長]
会期	2025年9月13日(土)～11月30日(日) [79日間]
会場	愛知芸術文化センター 愛知県陶磁美術館 瀬戸市のまちなか
主催	国際芸術祭「あいち」組織委員会 [会長 大林剛郎(株式会社大林組取締役会長 兼 取締役会議長)]
事業展開	現代美術 ・国内外の54組のアーティスト及びグループの新作を含む作品を展示し、国際色豊かな現代美術を紹介します。 ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターや、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかでの作品展示など、県内での広域展開を図ります。 パフォーミングアーツ ・国内外の先鋭的な演劇、ダンスなどの舞台芸術作品を、愛知芸術文化センターを中心に9演目上演します。 ラーニング ・幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。 連携事業 ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内4か所で開催します。 ・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。

会場



愛知芸術文化センター

Aichi Arts Center

国内外の20世紀美術を中心に充実した作品を所蔵する「愛知県美術館」、大ホール、コンサートホール、小ホールなどを有する「愛知県芸術劇場」、アートスペース、アートライブラリー、アートプラザで構成される「愛知県文化情報センター」からなる複合文化施設。愛知県の文化芸術の拠点として、名古屋市の中心部に1992年開館。



愛知県陶磁美術館

Aichi Prefectural Ceramic Museum

日本を代表する窯業地・瀬戸に「愛知県陶磁資料館」として1978年開館。2013年に名称変更し、「愛知県陶磁美術館」として新たなスタートを切った。

緑あふれる広大な敷地内に、充実した2つの展示施設「本館」「デザインあいち」、作陶体験施設「陶芸館」、古窯跡を公開する「窯の記憶」などがあり、様々な角度からやきものにアプローチするやきもの専門ミュージアム。



瀬戸市のまちなか

Seto City

名古屋市中心部から北東約20kmに位置し、周囲を小高い山々に囲まれ、千年以上のやきものの歴史を有する人口約13万人の市。

良質で豊富な陶土に恵まれたこの地で、先人たちは新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、陶都として発展させたことから、やきものの代名詞「せともの(瀬戸物)」の語源ともなった。

2017年には日本六古窯(瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前)として日本遺産に認定され、現在でも、多くの陶芸作家や「ツクリテ」が市内の窯元や工房などで、日々新たな作品を生み出す。窯道具で組まれた窯垣や陶器でできた橋の欄干など、やきもののまちならではの風情が随所に見られる。



灰と薔薇の「あいま」で、「来るべき世界」を考える

今回の芸術祭のテーマである「灰と薔薇のあいまに」は、現代アラブ世界を代表する詩人・アドニス（Adonis）の詩の一節からとったものです。戦争の惨禍を目の当たりにしたアドニスは、そのことによる環境破壊を嘆きましたが、同時に破壊の先に希望をも見出しました。私たちが今生きているこの世界では、人間と環境のあいだに深刻な問題が浮上しており、両者の溝はますます深まる一方です。こうした複雑に絡み合う人間と環境との関係を、国家や領土、民族といった人間中心の視点からではなく、地質学的な時間軸から考察することで、本芸術祭は、両者が互いに信頼し、育み、補い合うための道を探ります。そしてまた、灰（終末論）か薔薇（楽観論）かという極端な二項対立の議論を中心に据えることなく、その「あいま」にあるニュアンスに富んだ思考で世界を解きほぐそうと試みます。

多様化・多角化するアーティストの制作背景

「あいち2025」のテーマに共鳴する61組の参加アーティストは、多様なバックグラウンドを持っています。国内出身26組を含むアジアのアーティストに加え、中東、アフリカ、中南米など非欧米圏のアーティストを多数紹介するのも大きな特徴です。また、先住民族にルーツを持つアーティストや、さまざまな理由で出身地域とは異なる場所で活動しているアーティストのように、自らの社会的・文化的アイデンティティを見つめ直しながら表現を模索するアーティストも数多く含まれます。アートといってもその表現方法は実に多様であり、社会で起こっているさまざまな事柄と密接に結びついています。こうしたアーティストたちの多様な実践は、これまで欧米中心に紡がれてきた歴史を解きほぐし、複雑化していく世の中を新たな角度から見る・考える多くのきっかけを作ります。

千年続く「やきもの」の伝統を育む瀬戸の地域資源

「やきもの」のまちとして知られる瀬戸市は、陶土をはじめとする豊かな地域資源を持ち、それが人々の生活と密接に結び付いています。この地域ならではの素材や資源を用いた、千年もの歴史を刻む地場産業は、地域の誇りの源です。かつて陶磁製品の生産に伴い生み出された灰のように黒く染まった空や白く濁った川、木を失った里山は、環境の汚染や破壊である一方で、まちの繁栄の象徴でもありました。こうした産業のあり方は、人間と環境の関係についてさまざまな思考への道を開いてくれます。

テーマ／コンセプト

灰と薔薇のあいまに

枯れ木に花は咲くのか
灰と薔薇の間の時が来る
すべてが消え去り
すべてが再び始まるときに^{※1}

モダニズムの詩人アドニス¹は、1967年の第3次中東戦争の後、アラブ世界を覆う灰の圧倒的な存在に疑問を投げかけ、自身を取り巻く環境破壊を嘆きました。アドニスの詩において、灰は自然分解の結果生じるものではなく、人間の活動による産物、つまり無分別な暴力、戦争、殺戮の結果なのです。環境に刻まれた痕跡を通して戦争を視覚化することで、アドニスは、直接的な因果関係や現代的な領土主義の理解ではなく、地質学的かつ永続的な時間軸を通して戦争の遺産を物語ります。したがって、アドニスにとってそれはただ暗いばかりではありません。消滅の後には開花が続くからです。

この感情は、再生と復活のためには必ず破壊と死が先行するという、そして人類の繁栄のためには、恐怖を耐え忍びながらその道を歩まなければならないという、一般的な心理的概念を表しています。アドニスは、希望と絶望の感情と闘いながら、新たな未来、現在と過去に結びつく恐怖から解放された未来を思い描きます。戦争を国家、民族、部族、人間中心的なものよりも、集合体としての環境という視点から理解しようとするので、アドニスは戦争の多様な顔を強調します。すなわち、人類が引き起こした戦争、地球に対する戦争、私たち自身の内なる戦争、他者との戦争、ヒエラルキー・服従・抑圧・飢饉・飢餓・搾取をめぐる象徴としての戦争、資源とエネルギーをめぐる戦争、所有権や著作権をめぐる戦争、希望・夢・想像力をかけた戦争などです。

観察者、目撃者として戦争と破壊を経験したアドニスがこの詩を書いた政治的背景は、私たちの現在の経験にも根差しており、この芸術祭ではそれをさらに拡張しています。「灰と薔薇のあいまに」というテーマにおいて、私は人間が作り出した環境の複雑に絡み合った関係を考えるために、灰か薔薇かの極端な二項対立も、両者の間の究極の境界線も選ばないことにしました。むしろ、啓蒙思想の知識文化から受け継がれた両者の境に疑問を投げかけ、人間と環境が交わる状態、条件、度合いを想定します。今回の芸術祭では、戦争と希望という両極のいずれでもなく、その間にある私たちの環境の極端な状態を受け止めながら、人間と環境の間にあると思われる双方向の道を解体する可能性を探ります。

「灰と薔薇のあいまに」において、私は、人間と自然の関係についての規範的な枠組みとは異なる問いを投げかけます。すなわち、人間が自然を変質させているのでしょうか、それとも自然が人間を変質させているのでしょうか。人間とは単なる生体物質なのでしょうか。内面的で心理的な人間と、外面的で植物的な世界との間に明確な区別はあるのでしょうか。人間と環境の現代的な関係に取り組むとき、人新世から資本新世、プランテーション新世、クトゥルー新世^{※2}といった規範的な概念を受け入れ、批判するしか方法はないのでしょうか。芸術作品や展覧会制作は、未知の場所としての環境にアプローチし、新たな物語を発掘し、別の視点を見つけることができるのでしょうか。

第6回となる国際芸術祭「あいち2025」では、人間と環境の関係を見つめ、これまでとは別の、その土地に根差した固有の組み合わせを掘り起こしたいと考えました。農業が機械化され領土が金融化される以前には、世界の至るところで共同体が自然を管理し、環境景観との相互関係を発展させていました。そうした共同体は、自然の権利や保護を意識し、それを取り巻く動植物の生息地との間に親近感を感じて、互いに信頼し、育み、補い合う道を築いていました。この芸術祭では、そのような枠組みを現代的な芸術実践の一部として歓迎します。

このキュレトリアルなアプローチは、人間の痕跡が上に刻まれた複合体としての環境という現代的な想像力とは異なる、環境と共にある想像力の上に成り立っており、またそれを育むものでもあります。農業、化石燃料の採掘、深海採掘、資源の略奪、原料となる天然資源の開発といった活動が、帝国主義的な構造から受け継がれた成長中心の考え方と同様に、人間が環境に対して絶えずダメージを与えるシステムを構築し、また人間が環境に依存する危険な構造を発展させてきたことは、周知のとおりです。加えて、環境に関する私たちの知識は人間中心的であり、自分たちの利益のために環境を変質・改造することができる存在として、人間を人間以外の生命体よりも優位に置いています。

人間は、原材料を収奪できる空間へと環境を均す専門技術を持ったエンジニアであるだけでなく、人類の間に存在する不平等を再強化してもあります。今日私たちが占有している環境は、ある共同体が他の共同体よりも恩恵を受け、その生活の質が高まるように、異質化され、細分化され、分類され、モデル化されています。現在のグリーンエネルギー化の言説もまた、片方の半球にいる人々のためのものであり、他方で環境回復のために欠かせない方策の恩恵を受けることのできない共同体が、

世界中至るところに存在しているように思われます。このように、今日の人間と環境にまつわる実践の多くは、人種、社会、差別についての知識や考え方を何度も繰り返しているのです。

この結果、地球上の多くの地域が、何世紀にもわたって資源を採掘してきた植民地帝国の名残を生き、多国籍の食料・エネルギー・農業企業によって身動きが取れない現状に直面しています。こうした共同体の多くは、西側世界の植民地の遺産が作り出した人間と環境の関係から不当に大きな影響を受けており、そのような現在の都市と市民の構造は、私たちが今目にしている地球規模の変化の不可避的な原因となっているのです。そうした変化は、絶え間なく続く先住民族の大量虐殺と領土の略奪、植民地化された領土での数十年にわたる核実験、そして生活環境の壊滅的な喪失と人々の屈辱をもたらした、プランテーションや鉱山での強制労働の暴力とトラウマといった遺産の上に存在しています。このことは、私たちの寿命よりも長いスパンで感じられるようなかたちでこの惑星の地質を変え、そして今もなお変え続けており、人類そのものの生存に深刻な影響を及ぼしています。

今回の芸術祭では、現在の人間と環境の関係に関する一筋縄ではいかない物語や研究を念頭に置きながらも、私たちが直面している極端な終末論も楽観論も中心としないことを目指しています。私は、環境正義^{※3}に関する対話に複雑さを重ねることによってのみ、私たちが自らの責任に向き合い、不正義への加担に気づくことができるのだと考えています。ヒエラルキーの押しつけや偏った読み方を避けるために、世界中からアーティストやコレクティブを招き、私たちが生きる環境について既に語られている、そしてまだ見ぬ物語を表現するのです。アドニスが想像したように、試練を乗り越えて死や破壊に耐えるからこそ自然は回復力を持つのでしょうか。それとも、生命を奪われ機械化された空疎な気候フィクション^{※4}が表現するディストピア的で黙示録的な未来像が、今まさに私たちが生きる現実なののでしょうか。

愛知県に根差した今回の芸術祭には、灰と薔薇の間にある日本独自の環境に対する想像力も組み込まれます。愛知県は陶磁製品の産地として、瀬戸市は「せともの」の生産地として知られています。周囲の環境から得た素材や資源を用いるこれらの地場産業は、アーティストたちの新作の中にも立ち現れてくるでしょう。こうした産業は、地域の誇りの源であり、人間と環境の関係についての新たなモデルを模索する本芸術祭の支柱となります。たとえばこの地では、歴史的な写真や資料で目に

する陶磁製品の生産によって作り出された灰のような黒い空は、環境の汚染や破壊よりも、むしろ繁栄を意味していました。このように普遍主義的な人新世という人間中心の批評の視点から脱却する時、技術、地域に根差した知識、帝国の歴史、環境に対する想像力について、どのような思考が浮かび上がってくるのでしょうか。地場産業や地域遺産は、人間と環境の複雑に絡み合った関係について、新たな、幅を持った思考への道を開くのでしょうか。

今回の芸術祭ではさらに、手塚治虫の『来るべき世界』を始め、日本の大衆文化、小説、映画、音楽のさまざまなシーンや事例もまた参照します。手塚の物語では、アメリカ合衆国とソビエト連邦になぞらえた国同士の緊迫した関係が原爆の開発競争——それは日本の現代化と環境の状態に深く絡んだ歴史でもあります——を招き、偶然にも「フウムーン」と呼ばれる突然変異の動物種を生み出してしまう。フウムーンは人間を超える能力と知性を持ち、多くの動物と少数の人々を地球から避難させる作戦を考えます。自然と人間の副産物であるフウムーンが、窮地を救うためにやって来るわけです。

『来るべき世界』は、今回の芸術祭のテーマとアドニスの詩に共鳴しつつ、終末と開花の間を横断します。愛知県という地域性、アドニスや手塚といった作家への参照、そして参加アーティストたちが共に示すのは、「灰と薔薇のあいまいに」を掲げるこの芸術祭が、幅を持った考え方、有限なもの、そして中間にある状態を採り入れることによって、当然視されてきた位置づけやヒエラルキーを解きほぐせるということなのです。

国際芸術祭「あいち2025」芸術監督
フルール・アル・カシミ

※1 Adonis, "An Introduction to the History of the Petty Kings," *A Time Between Ashes and Roses*, 1970.

※2 人新世とは、人類が地球の環境を激変させた近現代を、地質年代として指す言葉。それに対し、深刻な環境破壊を招いたのは人類全体ではなく資本主義やプランテーション化を伴う植民地主義だとする立場（資本新世、プランテーション新世）や、そもそも人類を中心に据えずに、あらゆる種類の生物や非生物から精霊や神話の登場人物までが、堆肥のように共に混じりながら「地下世界に(chthonic)」生きるべきだという立場（クトゥルー新世）がある。

※3 出自や所得の多寡にかかわらず公平に安全な環境で暮らす権利を持つこと。

※4 気候変動がもたらす悪影響にまつわるフィクション。

Theme / Concept

A Time Between Ashes and Roses

*How can withered trees blossom?
A time between ashes and roses is coming
When everything shall be extinguished
When everything shall begin again**

After the Six Day War of 1967, the modernist poet Adonis lamented the environmental destruction of his surroundings, questioning the overwhelming presence of ashes in the Arab World. Ash, in Adonis's poem, is not generated through general decomposition but as a result of human activity, in this case through senseless acts of violence, war and carnage. Visualising the War through its imprints in the environment, he signifies its legacy through a geologic and everlasting time view rather than immediate causes-and-effects or a present-day understanding of territoriality. In this way, it is not all gloom for Adonis, as after extinction comes blossoming.

This sentiment illustrates a common psychological concept: for renewal and rebirth, destruction and doom must precede it; for humanity to prevail, horror must be endured and take its course. Adonis grapples with feelings of hope and despair to envision a new future, a future freed from horrors tied to the present and the past. In his extrapolation of war from the national, ethnic, tribal, and the human-centred towards a collective environment, he foregrounds the multiplicitous expressions of war: the human-made war, the war on the planet, the war within ourselves, the war with others as well as the symbolism of the war on hierarchy, subjugation, oppression, famine, hunger, exploitation; the war on resources and energy; the war of possession and authorship; the war for hope, dreams and imagination.

The political context of Adonis' writing of the poem, who experiences states of war and destruction as an observer and witness, is grounded in our experience of the present and expanded upon in this triennial. In *A Time Between Ashes and Roses*, I chose neither binary extreme of ashes nor roses as ultimate frontiers to conceive of the entangled relationships of the human-made environment. I question the boundary between them—inherited from Enlightenment knowledge cultures—and posit states, conditions and spectrums of human-environmental pathways. Rather than polarities, the triennial acknowledges extremes of our environmental condition, between war and hope, and explores decomposition possibilities of the two-way

street conceived between humans and their environment.

In *A Time Between Ashes and Roses*, I question lines of inquiry separate from the canonical framing of the human-nature relationship: Are humans decomposing nature nor is nature decomposing humans? Are humans biomatter? Are there clear distinctions between the interior, psychological human, and the exterior, botanical world? Must we accept and critique canonical concepts—from the Anthropocene to Capitalocene to Plantationocene to Chthulucene—when addressing contemporary relationships between the human and the environment? Can art and exhibition-making approach the environment as a place of the unknown and to unearth new narratives and observe alternative perspectives?

For the sixth edition of the Aichi Triennale, I wanted to look at the relationships between human beings and the environment to unearth alternative land-based and indigenous assemblages. Prior to the mechanisation of agriculture and financialization of territory, communities from around the world stewarded nature and developed reciprocity with their environmental landscapes, conceiving of rights and protections of nature, as well as building paths of kinship, reliance, nutrition and replenishment with their surrounding habitats. This triennial hails this framework as part of contemporary artistic practices.

This curatorial approach builds on while also fostering a different imagination about contemporary imagination of the environment as a portmanteau of the human's imprint *on it*, not *with it*. It is cognizant that human activities such as agro-farming, fossil-fuel extraction, deep-sea mining, exploitation of raw natural resources as well as growth-centred mentalities inherited from imperial structures, have created a system in which the human has no respite over the environment and developed dangerous structures of dependence. Additionally, our knowledge about the environment is human-centred, placing us as superior to nonhuman lifeforms, able to alter and modify it for our benefit.

Not only is the human a technocratic engineer flattening the environment into spaces for the appropriation of raw materials, it also re-enforces the inequalities which exist within human species. The environment we occupy today is orientalist, speciated, classified and modelled to benefit some communities over others and to enhance some communities' quality of life

over others. Current discourse of greening energy also seems reserved for those who are positioned in different hemispheres with many communities from around the world unable to benefit from critical environmental rehabilitative strategies. Thus, much of today's human-environment practices reiterate racial, social and discriminatory knowledge and thinking.

Consequently, a large proportion of the globe lives and inherits centuries-long extractive colonial empires and finds their present condition calcified by multinational food, energy and agriculture corporations. Many of these communities are disproportionately affected by these human-environment relationships created by virtue of the western world's colonial legacies whose current urban and civil structures are overwhelmingly responsible for the global changes we're now seeing. It builds on the continuing genocide of indigenous people and their territories, the decades-long nuclear tests on colonised territories, legacies of violence and trauma in plantations and mines where forced labour has resulted in devastating loss of environmental life and indignity of people. This has changed and continues to change the geology of the planet in ways that will be felt beyond our lifespans, with severe implications for humanity's survival.

While acknowledging the formidable narratives and research about the human-environment relationships of the present, in this triennial I aim to decenter both the apocalyptic and optimistic extremes we find ourselves compelled to run to. I find it is only through layering complexity in our dialogue about environmental justice can we face our responsibilities and realise our complicity. To avoid imposing a hierarchy or preference for one reading over the other, this triennial invites artists and collectives from all over the world to realise existing and unknown narratives about the environment in which we occur. Is nature resilient because of how it is tested, and endures death and destruction as imagined by Adonis? Or are the dystopian, apocalyptic cli-fi futures which are void of life, mechanised and made superficial, a truly lived reality?

Rooting the triennial in Aichi Prefecture, Japan's own environmental imagination, between ashes and roses, will also be embedded in the exhibit. Aichi is a locus of ceramic production and Seto City is famous for the fabrication of *Setomono*. These local industries which work with the surrounding environment's materials and resources, will feature

in the artist commissions. Since these industries are a source of local pride, they support the triennial's exploration for alternative models of human-environment relationship. As an example, in Aichi, historic photographs and archives which depict ashy black skies generated from the production of ceramics signified prosperity rather than pollution and destruction. Thus, what conceptions of technology, locally-based knowledge, imperial history, environmental imaginations come up when we decenter the universalist Anthropocenic critique? Do such local industries and heritage pave way for alternative and spectral thinking about the human-environment entanglement?

Additionally, various moments and instances of Japanese popular culture, its fiction, films and music will also be referenced, such as *Nextworld* by Osamu Tezuka. In the novel, the USA and USSR are competing with each other in the atomic bomb race—a history deeply intertwined with the modern making of Japan and its environmental condition—and accidentally creates a race of mutant animals known as Fumoon. They are gifted with psychic powers and intelligence beyond humans who formulate a strategy to evacuate hundreds of animals and a small group of people off planet Earth. The Fumoon, a byproduct of nature-human species come to save the day.

Resonating with the theme of this triennial as well as Adonis's poem, *Nextworld* is a traversal between apocalypse and blossoming. Altogether, these references, the locality of the Aichi Prefecture, writers such as Adonis and Tezuka, as well as the participating artists, *A Time Between Ashes and Roses* is a triennial which shows that in adopting the spectral, limited and in between, assumed positionalities and hierarchies can come undone.

Hoor Al Qasimi
Artistic Director, Aichi Triennale 2025

*Adonis, "An Introduction to the History of the Petty Kings," *A Time Between Ashes and Roses*, 1970.

企画体制

芸術監督 | Artistic Director

フール・アル・カシミ

Hoor Al Qasimi

[シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター／国際ビエンナーレ協会(IBA)会長]

アラブ首長国連邦をはじめ中東、そして世界中のアートを繋ぐ支援者として、2009年にシャルジャ美術財団を設立し、現在は理事長兼ディレクターを務める。新たな試みやイノベーションの支援に情熱を注ぎ、国際巡回展をはじめ、レジデンス・プログラム、コミッション・ワークや制作助成、パフォーマンスや映画のフェスティバル、建築物の調査や保存、幅広い年齢層に向けた教育プログラムまで、同財団の活動領域を広げてきた。

第6回シャルジャ・ビエンナーレ(2003)の共同キュレーターとなって以来、同ビエンナーレのディレクターを務め、2023年の第15回シャルジャ・ビエンナーレのキュレーターに就任。また、2017年には国際ビエンナーレ協会会長に選出された他、シャルジャのアフリカ・インスティテュート会長や建築トリエンナーレ会長兼ディレクターとしても活動。過去にはMoMA PSI(ニューヨーク)やユーレンス現代美術センター(北京)などのボードメンバーも歴任。さらに、2026年に開催される第25回シドニー・ビエンナーレのアーティスティック・ディレクターに指名された。



Photo: SEBASTIAN BÖTTCHER

学芸統括 | Head of Curatorial

飯田志保子

Iida Shihoko

[キュレーター]

東京都生まれ。名古屋市在住。1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までプリズペンのクイーンズランド州立美術館／現代美術館内の研究機関に客員キュレーターとして在籍。韓国国立現代美術館2011年度インターナショナル・フェローシップ・リサーチャー。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関係に関心を持ち、ソウル、豪州複数都市、ニューデリー、ジャカルタ、ミラノで共同企画を実践。第15回アジア・アート・ビエンナーレ・バンガラデシュ2012、あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014キュレーター、あいちトリエンナーレ2019、国際芸術祭「あいち2022」チーフ・キュレーター(学芸統括)を務めた他、2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。国際美術館会議(CIMAM)会員、国際ビエンナーレ協会(IBA)会員、美術評論家連盟(AICA)会員。



Photo: ToLaLa studio

キュレーター(現代美術) | Curator (Contemporary Art)

入澤聖明

Irizawa Masaaki

[愛知県陶磁美術館学芸員]

大阪府生まれ。京都市立芸術大学大学院修士課程芸術学領域修了。京都国立近代美術館キュレトリアル・インターンシップを経て、2015年から2017年までアサヒグループ(旧アサヒビール)大山崎山荘美術館で学芸員として勤務。2018年より現職。専門は日本の近・現代陶芸史。芸術表現としての陶芸だけでなく、産業的な視点も軸として展覧会を企画。近年の主な担当展に「異才 辻貫堂の陶彫—陶芸であらざるの造形から」(2020年)、「昭和レトロモダン—洋食器とデザイン画」(2022年)、「やきもの現代考—内⇄外—」(2022年)、「ホモ・ファーベルの断片」(2022年)。その他、西枝財団キュレーター助成事業として「Dividing Line - Connecting Line」(2013年／川井遊木 共同企画)に参画。



キュレーター(パフォーミングアーツ) | Curator (Performing Arts)

中村 茜

Nakamura Akane

【パフォーミングアーツ・プロデューサー】

東京都生まれ。日本大学芸術学部在籍中より舞台芸術に関わる。2004年から2008年までSTスポット横浜プログラムディレクター、2006年株式会社precogの立ち上げに参画、2008年より同社代表取締役。2016年から2018年までアジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)のグランティとしてバンコクとニューヨークに滞在。現代演劇、コンテンポラリーダンスのアーティストやカンパニーの国内外の活動をプロデュースするとともに、サイトスペシフィックなフェスティバルや領域横断的な人材育成事業、動画作品をバリアフリーと多言語で配信するプラットフォーム事業などを手掛ける。海外ツアーや共同制作のプロデュース実績は30カ国70都市に及ぶ。2012年から2014年まで国東半島アートプロジェクト及び国東半島芸術祭(国東半島芸術祭実行委員会主催)パフォーミングアーツプログラム・ディレクター。2019年、True Colors Festival ～超ダイバーシティ芸術祭～(日本財団主催)アソシエイトディレクター兼副事務局長。2020年、アクセシビリティに特化したオンライン劇場「THEATRE for ALL」統括プロデュース。令和3年度(第72回)文化庁芸術選奨・文部科学大臣賞新人賞【芸術振興部門】受賞。



Photo: Takuya Matsumi

キュレーター(ラーニング) | Curator (Learning)

辻 琢磨

Tsuji Takuma

【建築家】

静岡県生まれ。横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了後、橋本健史、彌田徹とともに2011年に建築コレクティブ403architecture [dajiba] (以下403)を設立。403として、2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞、2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰、あいちトリエンナーレ2016出展等、国内外への出展多数。2017年に個人事務所となる辻琢磨建築企画事務所を浜松市にて設立後は、403と並行して、建物や空間の断続的でなめらかな変化をテーマに活動している。2019年には、あいちトリエンナーレ芸術大学連携プロジェクトの講師を、2020年から現在まで名古屋造形大学地域社会圏領域特任講師を務める。



Photo: goitani

キュレトリアルアドバイザー(現代美術) | Curatorial Adviser (Contemporary Art)

石倉 敏明

Ishikura Toshiaki

【人類学者／秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授】

シッキム、ダージリン、ネパール、東北日本等でのフィールド調査、環太平洋の比較神話学や複数種をめぐる芸術人類学の研究、アーティストとの協働制作や展覧会企画協力を行う。多摩美術大学芸術人類学研究所助手、明治大学野生の科学研究所研究員を経て現職。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」に参加。共著書に『Lexicon 現代人類学』、『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』(以上、以文社)など。



趙 純恵

Cho Sunhye

【森美術館 アソシエイト・キュレーター】

東京都生まれ。日本国内や東アジア地域での展覧会アシスタント、コーディネーター等を経て、あいちトリエンナーレ2016のアシスタント・キュレーターを担当。福岡アジア美術館の学芸員を経て現職。専門はアジア現代美術。近年は、汎アジアの移民当事者の美術史および視覚表現についての調査研究を行っている。企画した主な展覧会に、「アジア美術からみるLGBTQと多様性社会」(2019)、「福岡アジア美術館開館20周年記念展アジア美術、100年の旅」(2019)、「メッセージ—アジア女性作家たちの50年」(2020)、「水のアジア」(2023) (すべて福岡アジア美術館)などがある。



参加アーティスト

芸文：愛知芸術文化センター 愛陶：愛知県陶磁美術館 瀬戸：瀬戸市のまちなか

アーティスト名		生/結成年(没年)	出身/結成地(国)	活動拠点(国)	会場
現代美術					
バゼル・アッバス & ルアン・アブ＝ラーメ	Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme	1983 1983	キプロス 米国	米国、パレスチナ 米国、パレスチナ	芸文
メイサ・アブダラ	Maitha Abdalla	1989	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦	瀬戸
ジョン・アコムフラ	John Akomfrah	1957	ガーナ	英国	芸文
ロバート・アンドリュース	Robert Andrew	1965	豪州	豪州	瀬戸
浅野友理子	Asano Yuriko	1990	日本	日本	芸文
ミルナ・バーミア	Mirna Bamieh	1983	パレスチナ	ポルトガル	芸文
Barrack(古畑大気+近藤佳那子)	Barrack (Furuhata Taiki + Kondo Kanako)	2017結成	日本	日本	愛陶
マリリン・ボロル・ポール	Marilyn Boror Bor	1984	グアテマラ	グアテマラ	愛陶
ミネルバ・クエバス	Minerva Cuevas	1975	メキシコ	メキシコ	瀬戸
エレナ・ダミアニ	Elena Damiani	1979	ペルー	ペルー	愛陶
アフラ・アル・ダヘリ	Afra Al Dhaheri	1988	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦	芸文
プリヤギータ・ディア	Priyageetha Dia	1992	シンガポール	オランダ	芸文
ソロモン・イノス	Solomon Enos	1976	米国	米国	芸文
シモーヌ・ファタル	Simone Fattal	1942	シリア	フランス	愛陶
札本彩子	Fudamoto Ayako	1991	日本	日本	芸文
ハイベ・アース	Hive Earth	2017結成	ガーナ	ガーナ	愛陶
ウェンディー・ヒュバート	Wendy Hubert	1954	豪州	豪州	芸文
イキバウィクルル	ikkibawiKrrr	2021結成	韓国	韓国	芸文
カマラ・イブラヒム・イシャグ	Kamala Ibrahim Ishag	1939	スーダン	アラブ首長国連邦、スーダン	芸文
加藤泉	Kato Izumi	1969	日本	日本	愛陶
川辺ナホ	Kawabe Naho	1976	日本	ドイツ、日本	芸文
ムハンマド・カゼム	Mohammed Kazem	1969	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦	芸文
是恒さくら	Koretsune Sakura	1986	日本	日本	芸文
久保寛子	Kubo Hiroko	1987	日本	日本	芸文
シモーヌ・リー	Simone Leigh	1967	米国	米国	愛陶
チャヌーパ・ハンスカ・ルガー	Cannupa Hanska Luger	1979	米国	米国	愛陶
マユンキキ	Mayunkiki	1982	日本	日本	芸文
シェイハ・アル・マズロー	Shaikha Al Mazrou	1988	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦	瀬戸
宮本三郎	Miyamoto Saburo	1905-1974	日本	-	芸文
水谷清	Mizutani Kiyoshi	1902-1977	日本	-	芸文
諸星大二郎	Morohoshi Daijiro	1949	日本	日本	芸文
ムルヤナ	Mulyana	1984	インドネシア	インドネシア	芸文
ワンゲシ・ムトゥ	Wangechi Mutu	1972	ケニア	米国、ケニア	愛陶
永沢碧衣	Nagasawa Aoi	1994	日本	日本	愛陶

アーティスト名		生/結成年(没年)	出身/結成地(国)	活動拠点(国)	会場
ダラ・ナセル	Dala Nasser	1990	レバノン	レバノン	芸文
小川待子	Ogawa Machiko	1946	日本	日本	芸文
大小島真木	Ohkojima Maki	2023結成	日本	日本	芸文 愛陶
沖潤子	Oki Junko	1963	日本	日本	瀬戸
太田三郎	Ota Saburo	1884-1969	日本	-	芸文
セルマ&ソフィアン・ウィスイ	Selma & Sofiane Ouissi	1975 1972	チュニジア チュニジア	チュニジア、フランス チュニジア	瀬戸
クリストドゥロス・パナヨトウ	Christodoulos Panayiotou	1978	キプロス	キプロス	芸文
panpanya	panpanya	非公表	日本	日本	瀬戸
マイケル・ラコウィツ	Michael Rakowitz	1973	米国	米国	瀬戸
シルビア・リバス	Silvia Rivas	1957	アルゼンチン	アルゼンチン	芸文
西條茜	Saijo Akane	1989	日本	日本	愛陶
ハラール・サルキシアン	Hrair Sarkissian	1973	シリア	英国	芸文
佐々木類	Sasaki Rui	1984	日本	日本	瀬戸
バーシム・アル・シャーケル	Bassim Al Shaker	1986	イラク	米国	芸文
ヤスミン・スミス	Yasmin Smith	1984	豪州	豪州	愛陶
杉本博司	Sugimoto Hiroshi	1948	日本	米国	芸文
富安由真	Tomiyasu Yuma	1983	日本	日本	瀬戸
アドリアン・ビシャル・ロハス	Adrián Villar Rojas	1980	アルゼンチン	拠点を定めずに活動	瀬戸
山本作兵衛	Yamamoto Sakubei	1892-1984	日本	-	芸文
ロバート・ザオ・レンフイ	Robert Zhao Renhui	1983	シンガポール	シンガポール	芸文

パフォーミングアーツ

バゼル・アッバス& ルアン・アブ＝ラフメ	Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme	1983 1983	キプロス 米国	米国、パレスチナ 米国、パレスチナ	芸文周辺
AKNプロジェクト	AKN PROJECT	2020 発足	日本	日本	芸文
ブラック・グレース	Black Grace	1995 結成	ニュージーランド (アオテアロア)	ニュージーランド (アオテアロア)	芸文
クォン・ビョンジュン	Kwon Byungjun	1971	韓国	韓国	愛陶
フォスタン・リニエクラ	Faustin Linyekula	1974	コンゴ民主共和国	コンゴ民主共和国	芸文
マユンキキ+	Mayunkiki+	2025 結成	日本	拠点を定めずに活動	瀬戸 芸文
オル太	OLTA	2009 結成	日本	日本	芸文
セルマ&ソフィアン・ウィスイ	Selma & Sofiane Ouissi	1975 1972	チュニジア チュニジア	チュニジア、フランス チュニジア	芸文
態変	TAIHEN	1983 結成	日本	日本	芸文

アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。

アーティストの生・結成年、出身・結成地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

また必要に応じて、先住民の言語による地域名を併記しています。

現代美術

バゼル・アッバス & ルアン・アブ＝ラーメ

Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme

バゼル・アッバス、1983年ニコシア(キプロス)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。／
ルアン・アブ＝ラーメ、1983年ボストン(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。

バゼル・アッバスとルアン・アブ＝ラーメは、サウンド、映像、文章、インスタレーション、パフォーマンスなど、さまざまな分野で共に活動するアーティスト。二人の取り組みは、パフォーマンス性、政治的イマジナリー、肉体、仮想世界の横断にある。二人のアプローチの特徴は、サウンド、映像、テキスト、オブジェなど、既存の素材や自作の素材をサンプリングし、それらを全く新しい「台本」に再構築することである。その成果として、マルチメディア・インスタレーションやサウンドと映像のライブ・パフォーマンスという形で、サウンド、映像、テキスト、サイトが持つ政治的、情緒的、物質的な可能性を追求する表現を展開している。

主な発表歴

- 2024 個展「The song is the call, and the land is calling」コペンハーゲン・コンテンツラリー
／ニール・カールスベルグ・グリブテック美術館(デンマーク)
- 2024 個展「Only sounds that tremble through us」
MIT リスト・ヴィジュアル・アーツ・センター(マサチューセッツ、米国)
- 2023 個展「An echo buried deep deep down but calling still」
アストルップ・ファーンリ現代美術館(オスロ、ノルウェー)
- 2022 個展「May Amnesia Never Kiss Us on the Mouth」
ニューヨーク近代美術館(米国)／ミグロ現代美術館(チューリッヒ、スイス)



{May amnesia never kiss us on the mouth; only sounds that tremble through us} 2020-22 Photo: Christian Øien © Astrup Fearnley Museet, 2023.

メイサ・アブダラ

Maitha Abdalla

1989年コルフファッカン(アラブ首長国連邦)生まれ。アブダビ(アラブ首長国連邦)拠点。

さまざまなジャンルを横断するメイサ・アブダラは、映像、写真、彫刻、絵画、ドローイング、パフォーマンスを組み合わせる。演劇のパフォーマンス性と演出空間を活かし、民俗学や神話、ジェンダー、社会規範、心理学といった幅広いテーマを探索して制作を行うアブダラにとって劇場は、社会での経験や想像、記憶、空想を客観的に見つめる場である。彼女は、抽象と具象が往来する幻想的な舞台で自己の探求を続ける。その表現にはドラマ性と哀愁が濃い、しばしば自身の弱さを晒すような、生活空間に閉じ込められたキャラクターを演じる。アブダラにとって制作過程はパフォーマンスの延長線上にあり、絵具を指で塗り重ね、木炭で自身の輪郭をなぞるなど、身体を用いたアプローチを特徴とする。

主な発表歴

- 2023 「Evaporating Suns: Contemporary Myths from the Arabian Gulf」
バーゼル H. ガイガー文化財団(スイス)
- 2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2022 「Portrait of a Nation II」タバリ・アート・スペース(ドバイ、アラブ首長国連邦)
- 2022 個展「INT. The Body - Sunrise」クロムウェル・プレイス(ロンドン、英国)



{EVAPORATING SUNS} 2023

ジョン・アコムフラ

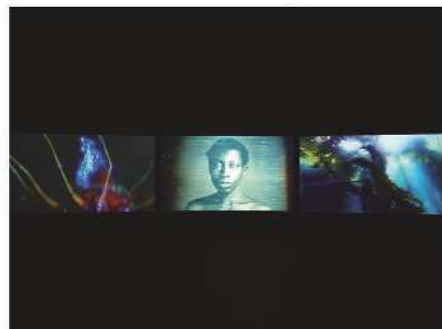
John Akomfrah

1957年アクラ(ガーナ)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

アーティスト、映画制作者として著名なジョン・アコムフラは、記憶、ポスト植民地主義、一時性、美学を探索し、世界中に存在する移民に着目して、しばしばディアスポラをテーマにしている。1982年にはロンドンで、デヴィッド・ローソンやリナ・ゴボールらとともに、影響力を持つブラック・オーディオ・フィルム・コレクティブを設立。ローソン、ゴボールとの協力関係は今なお続いており、アシェー・アコムフラを加えたスモーキング・ドッグ・フィルムズとして活動している。記録映像、スチール写真、撮り下ろし、ニュース映画を組み合わせた多層的な視覚様式で制作した画期的なマルチチャンネル映像のインスタレーションは、国際的に注目を集めている。

主な発表歴

- 2024 第60回ヴェネチア・ビエンナーレ、英国館(イタリア)
- 2023-24 個展「A Space of Empathy」フランクフルト・シルン美術館(ドイツ)
- 2023 個展「Five Murmurations」国立アフリカ美術館(ワシントンD.C.、米国)
- 2023-24 個展「Arcadia」ザ・ボックス(プリマス、英国)
- 2022-24 個展「John Akomfrah: Purple」ハーシェホーン博物館(ワシントンD.C.、米国)



{Vortigo Sea} 2015 © Smoking Dogs Films; Courtesy of Smoking Dogs Films and Lisson Gallery.

ロバート・アンドリュー

Robert Andrew

1965年ヌーンガー・カントリー／パース(豪州)生まれ。ミヤンジン／ブリスベン(豪州)拠点。

ロバート・アンドリューは、西オーストラリア州キンバリー地方のルビビ(ブルーム)とその周辺の土地と海域を居住地とするヤウル族の末裔である。アンドリューの作品は、否定されたり忘れ去られたりしてきた個人的な歴史や家族の歴史を掘り下げている。彼の作品は過去を語る一方で、自らの故郷と現在との関係性も明確にしている。彼は、プログラミングで動く機械と、土の顔料、黄土、石、そして土そのものなどを組み合わせ、西洋文化の支配的なパラダイムによって埋没したり疎外されたりしてきた、歴史的、文化的、また個人的な出来事を探求している。

主な発表歴

- 2024 「As Above, So Below」クイーンズランド工科大学美術館(ブリスベン、豪州)
- 2022 第23回シドニー・ビエンナーレ「rivus」シドニー現代美術館(豪州)
- 2022 第4回ナショナル・インディジニアス・アート・トリエンナーレ「Ceremony」オーストラリア国立美術館(キャンベラ)
- 2022 個展「Within an utterance」ミュージアム・オブ・オールド・アンド・ニュー・アート(MONA) (ホバート、豪州)
- 2020 ヨコハマトリエンナーレ2020「Afterglow」横浜美術館(神奈川県)



《Presence》2019
Installation view: 'Presence' IMA Belttower. Courtesy of the artist and Milani Gallery, Brisbane.

浅野友理子

Asano Yuriko

1990年宮城県生まれ。宮城県拠点。

浅野友理子は、その土地の食文化や植物の利用法を学ぶためにさまざまな土地を訪ね、出会った人々とのやりとりや自身の体験をなぞり、その土地で受け継がれてきたものを記録するように絵画を制作している。それらの作品は、単なる植物画にとどまらず、土地に長く伝わる知恵や知識に着目し、現代社会で失われつつある人と自然との共生や、人間以外の生き物に対する視点、生命の循環、あるいは女性の労働など、きわめて現代的な問題意識を内包している。そしてその色彩豊かで生命力にあふれる絵画作品を通じ、浅野はこの豊かな世界を祝福している。

主な発表歴

- 2024 「アーティスト・イン・レジデンス プログラム2024 "SPINNING SCAPES"」国際芸術センター青森
- 2024 みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2024、山形市蔵王体育館 小競技場
- 2023 個展「雅の温床」SNOW Contemporary(東京)
- 2023 「土とともに美術にみる〈農〉の世界—ミレー、ゴッホ、浅井忠から現代のアーティストまで—」茨城県立近代美術館
- 2019 「青森EARTH2019 いのち耕す場所 農業がひらくアートの未来」青森県立美術館



《休息の葉草》2020

ミルナ・バーミア

Mirna Bamieh

1983年エルサレム(パレスチナ)生まれ。リスボン(ポルトガル)拠点。

ミルナ・バーミアは、現代の政治的ジレンマに翻弄されるパレスチナのコミュニティの社会的関心と境界を紐解くことで、消失の政治と記憶の生成を探索している。視覚芸術、料理芸術、心理学、社会学の学位を持つバーミアは、2018年に立ち上げたライブ・アート・プロジェクト「パレスチナ・ホスティング・ソサエティ」を通じて、食と物語を融合させたソーシャリー・エンゲイジド・アート作品を制作。食習慣や何世代にもわたって受け継がれてきたレシピをもとに、ディナー・パフォーマンスやさまざまな介入型の作品を展開し、消滅の危機に瀕している伝統的なパレスチナの食文化の再生を目指す。2019年からは個人の歴史を共同体の観点から捉え直すべく、発酵のプロセスに注目。テキストやサウンド、陶磁器、ドローイング、ビデオ作品など、多彩な手法を取り入れながら、その場所ならではのインタラクティブなインスタレーションを制作。現在は発酵をテーマにした「Sour Things」シリーズと「Bitter Things」シリーズというインスタレーション・プロジェクトに取り組んでいる。

主な発表歴

- 2024 個展「Sour Things」NYU上海現代美術センター(中国)／ニカ・プロジェクト・スペース(パリ、フランス)
- 2024 「The Ecologies of Peace」アンダルシア現代美術創造センター(C3A)(コルドバ、スペイン)
- 2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2017-18 「ディアスポラ・ナウ! 〜故郷(ワタン)をめぐる現代美術」岐阜県美術館
- 2017 「7つのトランスフォーニー」トーキョーワンダーサイト渋谷



《Sour Cords》2024
Courtesy of Nika Project Space and the artist.

Barrack (古畑大気+近藤佳那子)

Barrack (Furuhata Taiki + Kondo Kanako)

2017年愛知県で結成。愛知県拠点。

古畑大気と近藤佳那子によるアートユニット。2017年に瀬戸市でカフェとギャラリーの機能を持つ「Art Space & Cafe Barrack」をオープン。月毎の企画展に加え、トーク、ライブ、ワークショップなども開催。また、Barrackとしてアートイベントやプロジェクトに参加し、自主企画も行う。美術・食・歴史・音楽・造形教育といった多層的な要素を取り込みながら、人との関わりの中で作品やスペースを展開している。

主な発表歴

- 2024 企画「Funny boneと移動する日常」
茨木市立ギャラリー、茨木市福祉文化会館、クリエイトセンター「階喫茶・食堂スペース」(大阪)
- 2023 「Toss, The Bell! tou;」(北海道)
- 2022 企画「瀬戸現代美術展2022」夢野団地各所(愛知)
- 2022 企画「瀬戸現代美術展2022 プレエキシビジョン Elements」旧祖母橋小学校(愛知)
- 2019 企画「瀬戸現代美術展2019」旧産業技術総合研究所中部センター瀬戸サイト(愛知)



《Art Space & Cafe Barrack》2017-
Photo: 阿野太一

マリリン・ボロル・ボール

Marilyn Boror Bor

1984年サンファンサカテペケス(グアテマラ)生まれ。グアテマラ(グアテマラ)拠点。

マヤ・カクチケル族のアーティスト、マリリン・ボロル・ボールは、キュレーター、美術教授、カルチュラル・マネージャーとしても活動する。幅広い素材を用いた社会参加型の芸術実践で知られるサン・カルロス・グアテマラ大学を卒業後(美術学士)、先住民のアイデンティティ、歴史的記憶、植民地主義、抵抗などをテーマとするプロジェクトを手掛ける。自国グアテマラ内外で多数の個展やグループ展に参加し、中南米以外にも、米国、スペイン、スイス、ドイツ、マレーシア、英国などで発表。革新的な現代アーティスト100人強を紹介する『Prime: Art's Next Generation』(Phaidon / 2022)にも選出された。

主な発表歴

- 2024 「Fugas de lo nuestro. Visualidades indígenas de sur a norte」
サルバドル・アジェンデ連帯美術館(サンティアゴ、チリ)
- 2024 「Musa. Perspectivas femeninas en las Colecciones del MAMM y MAC Panamá」
メデジン近代美術館(コロンビア)
- 2023 第35回サンパウロ・ビエンナーレ「choreographies of the impossible」(ブラジル)
- 2023 第23回バイス・アート・ビエンナーレ「I drank words submerged in dreams」(グアテマラ、グアテマラ)
- 2022 「COMMUNICATING VESSELS. Collection 1881-2021」ソフィア王妃芸術センター(マドリッド、スペイン)



《They too, the mountains, gave us back concrete.》2022

ミネルバ・クエバス

Minerva Cuevas

1975年メキシコシティ(メキシコ)生まれ。メキシコシティ(メキシコ)拠点。

ミネルバ・クエバスは、サイトスペシフィックなアクションや作品を通して、社会圏の実像を描写するリサーチ型のプロジェクトを展開するアーティスト。資本主義体制とその社会的帰結に内在する価値、取引、資産の概念を研究し、日常生活に潜む反逆の可能性を探る。インスタレーション、動画、壁画、彫刻、公共空間への介入など幅広いメディアを介して、ブランドロゴに見る身近な視覚表現をもじって、人々の政治的虚像に根付く概念に疑問を投げ、ソーシャル・コミュニケーションの活性化を狙っている。主な研究分野はエコロジー運動、人類学、企業史。1998年に Mejor Vida Corp を、2016年に International Understanding Foundation を設立。

主な発表歴

- 2023 「Re/Sisters: A Lens on Gender and Ecology」バービカン・センター(ロンドン、英国)
- 2023 個展「Game Over」アメックス美術館(メキシコシティ、メキシコ)
- 2021 第11回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「One Escape at a Time」ソウル市立美術館(韓国)
- 2019 「SOFT POWER」サンフランシスコ近代美術館(米国)
- 2005 第7回シャルジャ・ビエンナーレ「Belonging」(アラブ首長国連邦)



《The Trust》2023
Courtesy of Kurimanzurto Mexico, New York.

エレナ・ダミアニ

Elena Damiani

1979年リマ(ペルー)生まれ。リマ(ペルー)拠点。

エレナ・ダミアニは、地質学、地理学、地図学、考古学、天文学を用い、このような領域の分類や、物理的世界に対する私たちの理解を解釈し直す。ダミアニの作品は、地質年代、歴史、そして人類の軌跡の分類に対する別の読み方を提示している。彼女の表現には、ほんの束の間地上に存在する人間よりも、はるかに長い期間に渡って存在する構造物が、どのように形成され、機能するかを理解したいという思いが顕著に表れている。こうした思いが、私たちが生きる世界のさまざまな段階や自然のプロセスに対して私たちが抱いている考えを再解釈しようと試みる彼女の一連の探究を形成している。

主な発表歴

- 2023 第12回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「THIS TOO, IS A MAP」ソウル市立美術館(韓国)
- 2022 「Chosen Memories: Contemporary Latin American Art from the Patricia Phelps de Cisneros Gift and Beyond」ニューヨーク近代美術館(米国)
- 2022-23 「Abundant Futures. Works from the TBA21 Collection」アンダルシア現代美術創造センター(CSA)(コルドバ、スペイン)
- 2022 個展「Ensayos de lo sólido」リマ現代美術館(ペルー)
- 2015 第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、国際美術展「All the World's Futures」(イタリア)



《Relief I》2023
Photo: Juan Pablo Murrugerra

アフラ・アル・ダヘリ

Afra Al Dhaheri

1988年アブダビ(アラブ首長国連邦)生まれ。アブダビ(アラブ首長国連邦)拠点。

アフラ・アル・ダヘリの作品は、近年目覚ましい変化を遂げている都市アブダビ、そしてアラブ首長国連邦で幼少期を過ごした経験に深く根差している。ミクストメディア、彫刻、ドローイング、絵画、インスタレーション、写真、版画などの多様な媒体を用いて、アル・ダヘリは時間と適応、厳しさと脆さの概念を描いている。それぞれの実験的な作品は新規の位相を切り拓き、独特な参照の仕方での新たな現象や物事を具現化する方法を生み出す。アル・ダヘリの作品に見られる反復は、時間を引き延ばす手法であり、作品の一つひとつの段階を深く体験し、味わう手段でもある。

主な発表歴

- 2024 「Public Matter」パブリック・アート・アブダビ・ビエンナーレ(アラブ首長国連邦)
- 2024 「Between the Tides: A Gulf Quinquennial」NYUアブダビ・アートギャラリー(アラブ首長国連邦)
- 2023 個展「Give Your Weight To The Ground」グリーン・アート・ギャラリー(ドバイ、アラブ首長国連邦)
- 2022 「Icon, Iconic, Art Here 2022」リシャル・ミル・アートプライズ、ルーブル・アブダビ(アラブ首長国連邦)
- ／グリーン・アート・ギャラリー(ドバイ、アラブ首長国連邦)
- 2021 個展「Split Ends」グリーン・アート・ギャラリー(ドバイ、アラブ首長国連邦)



《Split Ends》2020
Photo by Anna Shtraus
Courtesy the Artist and Green Art Gallery, Dubai

プリヤギータ・ディア

Priyageetha Dia

1992年シンガポール生まれ。ハーグ(オランダ)拠点。

プリヤギータ・ディアは、時間と共に展開するタイムベースド・メディアやインスタレーションを手掛けるアーティスト。その作品には、東南アジアの労働の歴史、熱帯地域へのまなざし、祖先の記憶と機械の論理の邂逅などのテーマが編み込まれている。過去の記録やフィールドでのリサーチを通じて、単線的ではない思考のあり方を探求し、主流の言説を拒む実践を展開。現在はオランダを拠点に活動している。



《LAMENTHEAT》2023

主な発表歴

- 2024 パンコク・アート・ビエンナーレ2024「Nurture Gaia」(タイ)
- 2024 マニフェスタ15バルセロナ(スペイン)
- 2024 第60回ヴェネチア・ビエンナーレ関連イベント「The Spirits of Maritime Crossing」スミス・マンジッリ・ヴァルマラーナ館(イタリア)
- 2024 デイルイヤー・ビエンナーレ2024「After Rain」(リヤド、サウジアラビア)
- 2023 フリーズ・ソウル2023(韓国)

ソロモン・イノス

Solomon Enos

1976年オアフ(米国)生まれ。オアフ(米国)拠点。

ネイティブ・ハワイアン画家ソロモン・イノスは、イラストレーター、壁画アーティスト、ゲームデザイナー、教育者、語り部であり、また35年の経験を持つ地域社会の活動家でもある。ハワイのホノルルを拠点に活動しているイノスの作品は、ハワイだけでなく、世界中でも目にすることができる。イノスは、地域で貢献活動をリードする家族のもとに生まれ、幼い頃から自己の文化を伝え、作品を通して希望を語り継ぐ「ナラティブ」の制作に携わることを受け継いできた。



《MMMMRRZZZMMM》2019

主な発表歴

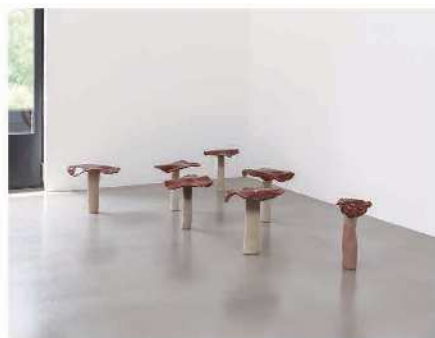
2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
2019 ホノルル・ビエンナーレ2019「TO MAKE WRONG / RIGHT / NOW」(米国)
2016-17 「CTRL+ALT: A Culture Lab on Imagined Futures」477ブロードウェイ(ニューヨーク、米国)
2016-17 「'Ae Kai: A Culture Lab on Convergence」旧フードランドアラモアナセンター跡地(ホノルル、米国)
2012 第7回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館|現代美術館(ブリスベン、豪州)

シモーヌ・ファタル

Simone Fattal

1942年ダマスカス(シリア)生まれ。パリ(フランス)拠点。

レバノンで育ち、ペイルートのエコール・デ・レトルで哲学を専攻。その後パリに渡り、ソルボンヌ大学に入学。1969年にペイルートに戻った後、ビジュアル・アーティストとして活動を開始し、レバノン内戦が始まるまで絵画作品を発表し続けた。1980年にレバノンを離れ、カリフォルニアに移住。革新的な作品に特化した現代文学の出版社ポスト・アポロ・プレスを設立した。1988年にサンフランシスコ・アート・インスティテュートに入学したのをきっかけにアーティストとしての実践を再開し、彫刻に新たな情熱を傾けるようになった。



《Mushrooms in a Forest》2023
Photo: Wolfgang Glünzel

主な発表歴

2024 個展「metaphorS」セセッション館(ウィーン、オーストリア)
2023 個展「The Manifestations of the Voyage」ホルティクス(フランクフルト、ドイツ)
2022 第59回ヴェネチア・ビエンナーレ、国際美術展「The Milk of Dreams」(イタリア)
2021 個展「Finding a Way」ホワイトチャペル・ギャラリー(ロンドン、英国)
2019 個展「Works and Days」MoMA PSI(ニューヨーク、米国)

札本彩子

Fudamoto Ayako

1991年山口県生まれ。京都府拠点。

札本彩子は、食品工場やフードデリバリーで働いた経験をもとに、現代の食を考察している。これまで、食卓にのぼらないまま廃棄される食品を目の当たりにしてきた札本にとって、消えゆく食品のレプリカを制作することは、食の記憶の再現であり、自身を取り巻く食の状況の整理でもある。



《pavlov's dog》2021

主な発表歴

2024 「アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.16 札本彩子」岐阜県美術館
2023 「なめらかでないくさ」現代美術 in 西尾 尚古荘不言庵(愛知)
2023 個展「Replicant—食卓のかたち—」東御市梅野記念絵画館・ふれあい館(長野)
2022 「Kyoto Art for Tomorrow 2022—京都府新鋭選抜展」京都文化博物館
2020 個展「Black Box」KUNSTARZT(京都)

ハイク・アース

Hive Earth

2017年アクラ(ガーナ)結成。アクラ(ガーナ)拠点。

ハイク・アースは、アートとデザイン、そして環境に配慮した建築の融合に取り組むスタジオ。ガーナを拠点に、版築など環境に負荷をかけない地元の素材や技法を用いて、サステナブルな空間やオブジェを生み出すことを専らとしている。その作品は、土が持つ多様な質感、色調、触感を活かし、その自然な美しさを称えるものとなっている。伝統と革新を両輪として、古代の建築技術が持つ芸術的な可能性を探索し、環境と調和する機能的な構造物や彫刻作品を発表。その作品は、観る者にアートと建築とエコロジーの関係性を再考させる力を持っている。ワークショップやコラボレーションを通じて、地域社会が地球の生み出す素材に触れ、芸術として、また生活様式としての「持続可能なデザイン」に対する理解を深められるよう支援している。「あいち2025」ではラーニングとのコラボレーションで版築のプロジェクトを実施予定。ハイク・アースは主に版築のテクニカルサポートを務める。



《Etsi Dan Wall for Sharjah Architecture Triennial》2023
Photo: Sharjah Architectural Triennial

主な発表歴

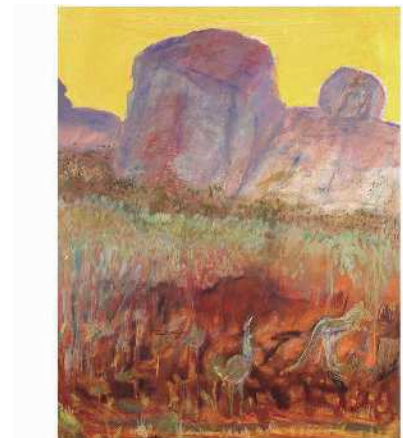
2023-24 第2回シャルジャ建築トリエンナーレ、アル・カシミヤ・スクール(アラブ首長国連邦)

ウェンディー・ヒュバート

Wendy Hubert

1964年インジバルンディ・カントリー／ビルバラ(豪州)生まれ。
インジバルンディ・カントリー／ビルバラ(豪州)拠点。

ウェンディー・ヒュバートはインジバルンディの長老であり、無形文化財保持者、アーティスト、言語学者でもある。ビルバラ(西オーストラリア州)のレッドヒル・ステーションで生まれ、その後ミンドル・ステーション、オンスローを経てロウバーンに定住。その地での地域保健活動を通じて夫と出会い、3人の息子を授かる。2019年にジュルフル・アート・グループで絵画制作を始め、幼少期に見ていた風景やインジバルンディとグルマ・カントリーの重要な場所を描いた風景画で知られるアーティストとなる。「私は自分の故郷(カントリー)とその旋を知っています。インジバルンディの守り手として、老いてもその考え方と生き方を貫いています。」(ウェンディー・ヒュバート2021年)



《Hunting Place》2024

主な発表歴

2024 個展「ウェンディー・ヒュバート: NGURRA GOONMARDI」サロン・アート・プロジェクト(ダーウィン、豪州)
2024 「The Good Shed, Perth Represent: Aboriginal Figurative Practice in WA, Part 2」
フォーラム・ギャラリー(パース、豪州)
2024 第24回シドニー・ビエンナーレ「Ten Thousand Suns」(豪州)
2023 「Telstra NATSIAA」ノーザンテリトリー博物館・美術館(ダーウィン、豪州)
2022 「Tracks We Share」西オーストラリア州立美術館(パース、豪州)

イキバウィクルル

ikkibawiKrrr

2021年ソウル(韓国)で結成。ソウル(韓国)拠点。チョ・ジウン、1975年ソウル(韓国)生まれ。／
キム・ジュンウォン、1996年ソウル(韓国)生まれ。／コ・ギョル、1994年テジュ島(韓国)生まれ。

2021年結成のイキバウィクルルは、自然現象、人間、生態系間の繋がりを探求するビジュアルリサーチバンド。「イキバウィ」とは、「苔が生えた岩」を意味し、「クルル」は擬音語である。苔は、空気と地面の境界線に生息し、小さな身体にもかかわらず周囲に適応し、他世界との境界線に沿って自らの世界を拡張する。イキバウィクルルは、苔の生存方法から生まれた動きが境界の重なりを厚くするというのを、アプローチの手掛かりとしている。苔の生き様をコレクティブの手法に取り入れ、個々の活動以上のものとして自らの実践を広め、生活と美術の境界層を広げることを目指している。



《Seaweed Story》2022

主な発表歴

2023 第12回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「THIS TOO, IS A MAP」ソウル市立美術館(韓国)
2023 第14回光州ビエンナーレ「soft and weak like water」(韓国)
2023 第40回エヴァ・インターナショナル(リムリック、アイルランド)
2023 「DMZ Exhibition: CHECKPOINT」キャン・グリーブス(坡州、韓国)
2022 ドクメンタ15(カッセル、ドイツ)

カマラ・イブラヒム・イシャグ

Kamala Ibrahim Ishag

1939年オムドゥルマン(スーダン)生まれ。シャルジャ(アラブ首長国連邦)、ハルツーム(スーダン)拠点。

先駆的なアーティストとして知られるカマラ・イブラヒム・イシャグは、スーダンの芸術運動ハルツーム派の一員として、アフリカのモダニスト達の芸術に関する議論に大きな影響を与えた。イシャグはまたスーダンの伝統的な美意識に異を唱えるクリスタリスト派の創設メンバーでもあり、独自の芸術言語を用いて現実と欺瞞、精神性と神性、女性に対する支配や束縛といったテーマを探究している。自然やスーダンのザール信仰の憑依儀礼に着想を得たイシャグの作品には、歪んだ人物が描かれることが多い。何かに閉じ込められているようなその姿は、スーダンやアフリカ地域の女性たち、世界中に離散したアフリカの女性たちの、変化に翻弄された人生を想起させる。イシャグの作品はニューヨーク近代美術館やシャルジャ美術財団に収蔵されている。2019年にプリンスクラウス文化賞の最高賞を受賞。



《My Two Neems》2023
Photo: Walood Shah

主な発表歴

- 2024-25 「Vital Signs: Artists and the Body」ニューヨーク近代美術館(米国)
- 2022-23 個展「Kamala Ibrahim Ishag: States of Oneness」サーペンタイン・サウス・ギャラリー(ロンドン、英国)
- 2016-17 個展「Women in Crystal Cubes」ギャラリー4、アル・ムレイハ・アートスペース、シャルジャ美術財団(アラブ首長国連邦)

加藤泉

Kato Izumi

1969年島根県生まれ。東京都拠点。

加藤泉の絵画や彫刻には、未分化な原始生物、胎児、動物、またはそれらのハイブリッドのような存在が表象されている。人間、自然、環境をめぐる根源的な関係が見出される彼の作品は、胎内回帰を想起させながら、新たな神話的物語を紡ぎ出しているようでもある。2007年の第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展「Think with the Senses - Feel with the Mind. Art in the Present Tense」に選出されたのをきっかけに、国内外で精力的に発表を行う。近年では、木彫に彩色を施した従来の彫刻に加え、ソフトビニール、プラモデル、石、布地、アルミニウム、ブロンズも素材に加わり、加藤の絵画の意識はソフト・スカルプチャーやインスタレーションへと拡張している。



《無題 Untitled》2023
Photo: 奥野土
©2023 Izumi Kato

主な発表歴

- 2022-23 個展「寄生するプラモデル」ワタリウム美術館(東京)
- 2021-22 個展「STAND BY YOU」SCAD Museum of Art(サバンナ、米国)
- 2019-20 個展「LIKE A ROLLING SNOWBALL」原美術館/ハラ ミュージアム アーク(東京/群馬)
- 2019 個展「Izumi Kato」カーサ ウィ財団(プエルト・エスコンディード、メキシコ)
- 2018 個展「Izumi Kato」レッドブリック美術館(北京、中国)

川辺ナホ

Kawabe Naho

1976年福岡県生まれ。ハンブルク(ドイツ)、福岡県拠点。

川辺ナホは、映像、インスタレーション、立体、ドローイング、出版物、あるいはこれらを組み合わせた作品を制作する、学際的な思考を持つアーティスト。川辺の実践においては、「炭」というマテリアルに焦点を当てた社会的、文化的、歴史的なリサーチの結果が、現代の社会構造を見直そうとする試みという点で、個人的な経験と重なり合っている。近年は炭鉱についてのリサーチをベースに、エネルギー産業と移動する人や物質をテーマとした制作を行っている。武蔵野美術大学映像学科卒業後、2001年にDAADの奨学金を受けドイツへ留学し、現在は日本とドイツを行き来しながら活動を行っている。



《In Search of Utopia - Et in Arcadia ego》(部分) 2024
Photo: 川崎一徳

主な発表歴

- 2024 「ルール炭田の日本人：越境者たち」ケルン日本文化会館(ドイツ)
- 2019 「Fuzzy Dark Spot. Videart from Hamburg」
ファルケンベルク・コレクション/ダイヒートル・ハンブルク(ドイツ)
- 2019 個展「Blooming Black」OCT Boxes Art Museum(広州、中国)
- 2014 「想像しなおし」福岡市美術館
- 2011 「Archive und Geschichte(n)」ハンブルク美術館(ドイツ)

ムハンマド・カゼム

Mohammed Kazem

1969年ドバイ(アラブ首長国連邦)生まれ。ドバイ(アラブ首長国連邦)拠点。

ムハンマド・カゼムは、ビデオや写真、パフォーマンスなど多彩な表現手法を用いて、自身の環境や経験を新たな視点から捉え直す作品を生み出してきた。その作品には音楽を学んだ経験が大きな影響を与えており、音や光といった一時的な現象を具体的な形で表現するプロセスを探究している。作品にはしばしば彼自身が登場するが、とりわけ建国以来急速に現代化が進むアラブ首長国連邦に関連づけながら、自らの主観を主張する手段として、地理的な位置や物質性、要素に呼応している。キャリア初期にエミレーツ美術協会に参加。同国の先駆的なアーティスト、ハッサン・シャリフ、アブドラ・アル・サーディ、ムハンマド・アフメド・イブラヒム、フセイン・シャリフと形成した非公式なグループ「ザ・ファイブ」のメンバーとして、コンセプチュアル・アートや複数の学術分野の中間領域を探究するアートを実践している。2012年に米国フィラデルフィアにあるジ・アーツ大学で美術学修士号を取得。

主な発表歴

- 2023 「Manar Abu Dhabi」サマリア島(アブダビ、アラブ首長国連邦)
- 2022 第16回リヨン・ビエンナーレ「manifesto of fragility」(フランス)
- 2016 第1回銀川ビエンナーレ(中国)
- 2015 第12回シャルジャ・ビエンナーレ「The past, the present, the possible」(アラブ首長国連邦)
- 2013 第55回ヴェネチア・ビエンナーレ、アラブ首長国連邦館(イタリア)



《Photographs with Flags》1997
Courtesy of the artist and Gallery Isabelle, Dubai

是恒さくら

Koretsune Sakura

1986年広島県生まれ。広島県拠点。

2010年アラスカ大学フェアバンクス校卒業。在学中はネイティブ・アート、絵画、彫刻を学ぶ。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程修了。国内外各地の鯨類と人の関わりや海のフォークロアをフィールドワークを通して探り、エッセイや詩のリトルプレス、刺繍作品として発表する。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰。2018年～2020年、東北大学東北アジア研究センター災害人文学ユニット学術研究員。2022年～2023年、文化庁新進芸術家海外研修制度・研修員としてノルウェーに滞在し、オスロ大学東洋言語学科の研究プロジェクト「Whales of Power」に客員研究員として参加。

主な発表歴

- 2024 「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って、国際芸術センター青森」
- 2023 「Whales of Power」オスロ大学人文社会科学図書館(ノルウェー)
- 2022 「VOCA展2022 現代美術の展望—新しい平面の作家たち—」上野の森美術館(東京)
- 2022 「NITTAN ART FILE 4:土地の記憶～結晶化する表象」苫小牧市美術館(北海道)
- 2021 「ナラティブの修復」せんだいメディアテーク(宮城)



《鯨を輝き、鯨を織む》2021
Photo: KOIWA Tsutomu
Courtesy of Sendai Mediatheque.

久保寛子

Kubo Hiroko

1987年広島県生まれ。千葉県拠点。

テキサスクリスチャン大学美術修士課程修了。先史芸術や民族・民俗芸術、文化人類学などにまつわる学説のリサーチをベースに、ワイヤーメッシュや農業用シート、防風ネットなどの工業製品を用いて彫刻作品を制作している。自然の脅威や遺物の破壊と再生、周縁化されてきた女性の表象などをテーマに、神話や祈りがかたちをなす偶像や、人々の暮らしの中から生まれた実用品に宿る美について、久保は作品を通じて現代的な視点から再考を促す。広島文化新人賞(2022年)、六甲ミーツ・アート公募大賞(2017年)受賞。KAMU KANAZAWA(石川)、おおさか創造千鳥財団、株式会社 IZAK(富山)などに大型作品が収蔵されている。

主な発表歴

- 2024 個展「鉄骨のゴッデス」ポーラミュージアム アネックス(東京)
- 2024 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024(新潟)
- 2023 GO FOR KOGEI 2023「物質的想像力と物語の繰り—マテリアル、データ、ファンタジー—」富岩運河環水公園(富山)
- 2023 Romantic Route 3, Falebiobog(苗栗、台湾)
- 2022 個展「ISAAC」LOKO Gallery(東京)



《ヒト型世の群像》2022
Photo: 浅野堅一

シモーヌ・リー

Simone Leigh

1967 年シカゴ(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

過去20年間にわたり、シモーヌ・リーは彫刻やビデオ、インスタレーションを用いた多面的な作品を制作してきた。すべての作品に通底するのは黒人女性としての主観性というテーマ。リーは自身の作品を「オートエスノグラフィック(自己民族誌的)」と表現する。彼女の陶やブロンズ彫刻は、伝統的にアフリカ美術と紐付けられてきたフォルムを採用したことが多い。パフォーマンスに影響を受けたインスタレーション作品は、歴史的先例と自己決定が交錯する空間を生み出す。リーは2000年代初頭に最初に作品を発表し始めた。ハマー美術館(ロサンゼルス)、スタジオ美術館(ハーレム)、テート・ギャラリー(ロンドン)、グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)などで個展を開催。

主な発表歴

2024-25 「Simone Leigh」ロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)／カリフォルニア・アフリカン・アメリカン博物館(ロサンゼルス、米国)／ハーシュホーン博物館と彫刻の庭(2023-24、ワシントンD.C.、米国)／ボストン現代美術館(2023、米国)
2022-23 「Simone Leigh」グレンストーン美術館(ボタマック、米国)
2022 第59回ヴェネチア・ビエンナーレ、米国館(金獅子賞)(イタリア)
2019 「ヒューゴ・ボス賞2018: Simone Leigh, Loophole of Retreat」グッゲンハイム美術館(ニューヨーク、米国)
2019 《Brick House》(インスタレーション)ハイライン・プリンス(ニューヨーク、米国)



《Untitled》2023-24
©Simone Leigh, courtesy the artist and Matthew Marks Gallery

チャヌーパ・ハンスカ・ルガー

Cannupa Hanska Luger

1979年スタンディング・ロック保留地／フォート・イェーツ(米国)生まれ。グロリエタ(米国)拠点。

チャヌーパ・ハンスカ・ルガーは、ニューメキシコ州を拠点に活動する作家で、モニュメンタルなインスタレーションや彫刻、パフォーマンスを通して、21世紀の先住民が直面する切迫した状況を表現している。陶磁、鉄、繊維、映像、再利用素材などを組み合わせたルガーの作品は、思弁的なフィクションを展開し、土地に根ざした修復を行い、社会との関わりを通じて共感を呼ぶ実践である。ノースダコタ州のスタンディング・ロック保留地で生まれた彼は、フォート・ベルトルド保留地の三大連携部族であるマンダン族、ヒダツァ族、アリカラ族、そしてラコタ族のメンバーでもある。ルガーは、文化批評の分析的な視点と、多様な素材・環境・自らの共同体に対する献身と敬意とを兼ね備えており、その大胆な視覚表象は、先住民の世界観を強調しつつも、集合体としての「人間」という側面に対して新しい視点を提示する。

主な発表歴

2024 ホワイトニー・ビエンナーレ2024「Even Better than the Real Thing」ホワイトニー美術館(ニューヨーク、米国)
2023 「The Land That Carries Our Ancestors」ワシントン・ナショナル・ギャラリー(米国)
2022 「Water Memories」メトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)
2019 個展「Every One」ガーディナー博物館(トロント、カナダ)
2016 個展「Every Line is a Song, Each Shape is a Story」国立市民人権センター(アトランタ、米国)



《A WAY HOME》2020

マユンキキ

Mayunkiki

1982年チカブニコタン、ヤウンモシリ／近文コタン、北海道生まれ。ヤウンモシリ／北海道拠点。

アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」「アベトウンベ」のメンバー。2021年よりソロ活動開始。2018年より、自身のルーツと美意識に纏わる興味・関心からアイヌ女性の伝統的な文身「シヌイエ」の研究を開始。現代におけるアイヌの存在を、あくまで個人としての観点から探求し、表現している。



《Siknure - Let me live》2022
Photo: Stuart Whippes
Courtesy of Ikon Gallery.

主な発表歴

2024 「観読できない わたしの言葉」東京都現代美術館
2022 個展「SIKNURE - Let me live」アイコン・ギャラリー(バーミンガム、英国)
2021-22 リボンアート・フェスティバル2021-22「利他と流動性」石巻市街地、旧サウナ石巻(宮城)
2021 個展「SINIRIT シンリッ:アイヌ女性のルーツを探索する出発展」CAIOS(北海道)
2020 第22回シドニー・ビエンナーレ「NIRIN」(豪州)

シェイハ・アル・マズロー

Shaikha Al Mazrou

1988年シャルジャ(アラブ首長国連邦)生まれ。ドバイ(アラブ首長国連邦)拠点。

シェイハ・アル・マズローは、シャルジャ大学美術デザイン学部を卒業。2014年にロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アーツで芸術修士号を取得し、MFA学生賞を受賞した。その後、母校シャルジャ大学で彫刻の授業を担当、現在は、ニューヨーク大学アブダビ校にて准教授を務めている。アル・マズローの彫刻における実験と探究は、物質性の表現、すなわち形式と内容の緊張関係と相互作用を表わしており、同時に素材とその物理的特性の直感的で鋭敏な理解でもある。アル・マズローは、色彩理論から幾何学的抽象主義に至るまで、フォルムと素材に焦点を当てた現代のアートムーブメントの概念を統合・進化させている。



《Accordion Structure》2022

主な発表歴

- 2024 アートバーゼル香港、香港コンベンション&エキシビションセンター
- 2022-23 個展「Dwelling in the Gap」ロウリー・シャビビ(ドバイ、アラブ首長国連邦)
- 2022 フリーズ・スカルプチャー2022、リージェンツ・パーク(ロンドン、英国)
- 2022 デザートXアル・ウラー2022(サウジアラビア)
- 2020 「Rearranging the Riddle」マラヤ・アートセンター(シャルジャ、アラブ首長国連邦)

宮本三郎

Miyamoto Saburo

1905年石川県生まれ。1974年東京都にて没。

石川県能美郡(現在の小松市)に生まれ、川端画学校で藤島武二に学び、また安井曾太郎に指導を受け、二科展を中心に発表を行いながら、雑誌の挿絵や表紙絵の制作でも活躍した。戦時中は従軍画家として藤田嗣治、小磯良平らとともにマレー半島、タイ、シンガポールなどに渡り、数々の戦争記録画を制作した。戦後は熊谷守一、正宗得三郎らと第二紀会を設立。社団法人日本美術家連盟の理事長として美術家の社会的地位向上に尽力し、金沢美術工芸専門学校(現・金沢美術工芸大学)、多摩美術大学で教鞭を執り後進の育成にも注力した。



《東山動物園駅》(東山動物園駅 No. 2) 1948
名古屋市美術館蔵

主な活動歴

- 1927 「第14回二科展」に初入選
- 1942 戦争記録画制作のため東南アジア各地に渡る
- 1947 第二紀会を設立
- 1958 日本美術家連盟理事長に就任
- 1966 日本芸術院会員となる

水谷清

Mizutani Kiyoshi

1902年岐阜県生まれ。1977年東京都にて没。

岐阜県郡上市(現在の郡上市)に生まれ、早稲田大学商学部在学中から川端絵画研究所洋画科へ入所、その後は小杉放庵に師事した。春陽会を舞台に、フォーヴィスムからの影響が色濃い作品を精力的に発表。1936年のインド遊学を転機として、逞しく生きる市井の人々の姿を力強く描く画風を確立した。戦後は、1957年にサンパウロ・ビエンナーレの日本委員として南米を歴訪、翌58年にはメキシコ国立芸術院(ベジャス・アルテス宮殿)で個展を開催するなど、国際的にも活躍した。



《東山動物園駅》(東山動物園駅 No. 2) 1948
名古屋市美術館蔵

主な活動歴

- 1926 第4回春陽会展で初入選
- 1929 渡欧、パリのグラン・ショーミエールに入所
- 1936 インドに遊学する
- 1948 疎開先の恵那郡から名古屋市に転居、さらに上京し、春陽会事務所を担当する
- 1956-67 金沢大学教育学部で教鞭を執る

諸星大二郎

Morohoshi Daijiro

1949年長野県生まれ。東京都拠点。

高校卒業後、公務員として勤めながら漫画を描き始め、手塚治虫が創刊した雑誌『COM』に投稿、1970年にデビューを果たした。以降、SFやホラー、伝奇といったジャンルを中心に、日常と隣り合わせの異界の存在を、ときにユーモアを交えながら独特なタッチで描き続けている。東西の神話や歴史、伝説、民俗、文学、考古遺物などに題材をとり、豊かな想像力で虚実を織り混ぜながら独創的な短編や中編を多く生み出してきた一方で、長きにわたって連載を続ける長編も存在する。50年を超えるキャリアを通じて、漫画界はもちろん、音楽やアニメーションなど日本のポピュラーカルチャーにも大きな影響を与え続けている。

主な受賞歴

2014 「瓜子姫の夜・シンデレラの朝」で第64回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞
2008 「茶と紙魚子」シリーズで第12回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞
2000 『西遊妖猿伝』で第4回手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞
1992 「ばくとフリオと校庭で」『異界録』で第21回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞
1974 「生物都市」で第7回手塚賞に入選



『変身の森』『マッドメン』『月刊少年チャンピオン』1981

ムルヤナ

Mulyana

1984年バンドン(インドネシア)生まれ。ジョグジャカルタ(インドネシア)拠点。

ムルヤナ(マンガモエル)は、毛糸や布を用いて表現するビジュアル作家。2012年にバンドンのインドネシア教育大学美術学部を卒業し、同年「Mogus World」展を開催後、ジョグジャカルタに拠点を移した。Mogusとは、自らの分身であるタコの怪物で、海中を模した生態系を背景に作り上げた。マンガモエルの作品は、毛糸が主な素材で、鉄の構造物や他の素材も支柱等にも使用し、巨大なフォルムを成している。また、主要素材を節約するため、モジュラー式となっている。自分の着想が環境に間接的な影響を及ぼすことを意識し、新しい毛糸ではなく、バンドンにある工場の余り物の毛糸を使用している。節約と素材のリサイクルにもなると考え、これが作品のコンセプトの核となっている。



『Sea Remember』2018
Collection of Paulus Ong.

主な発表歴

2023 「Imagery of Eastern Nusantara Sea」KINスペース(ジャカルタ、インドネシア)
2023-24 「BLUTOPIA」エアサイド(香港)
2023 個展「Modular Utopia」USC フィッシャー美術館(ロサンゼルス、米国)
2023 「水のアジア」福岡アジア美術館
2018 《Sea Remembers》アートジョグ2018「Enlightenment」ジョグジャカルタ国立博物館(インドネシア)

ワンゲシ・ムトゥ

Wangechi Mutu

1972年ナイロビ(ケニア)生まれ。ナイロビ(ケニア)、ニューヨーク(米国)拠点。

ワンゲシ・ムトゥの作品は、「人間の表象」という概念そのものを扱っている。私たちは自らをどのような存在として捉え、これが自分たちだと信じているイメージを再生産しているのか。また他者をどのように見て、そのイメージを作り出しているのかを表現している。ムトゥは、形象の比喩的表現との対話を繰り返すことにより、私たちが自らに抱えているイメージや思いを曇らせたり高めたりする。アートの領域内外における私たちの価値体系に疑問を投げかける。彫刻、絵画、映画、インスタレーション、コラージュなど、多様な技法と媒体で国際的に評価されているムトゥの作品には、ハイブリッドな女性生物や、色鮮やかなディストピア的夢のような光景が登場する。

主な発表歴

2023-24 個展「Wangechi Mutu: Intertwined」ニュー・ミュージアム(2023、ニューヨーク、米国)／ニューオリンズ美術館(2024、米国)
2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
2022 個展「Wangechi Mutu」ストーム・キング・アートセンター(ニューヨーク、米国)
2021 個展「Wangechi Mutu: I Am Speaking, Are You listening?」リージョン・オブ・オナー美術館(サンフランシスコ、米国)
2019-20 個展「The Façade Commission: Wangechi Mutu, The NewOnes, will free Us」メトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)



『Sleeping Serpent』2014
Courtesy of the Artist and Victoria Miro London.

永沢碧衣

Nagasawa Aoi

1994年秋田県生まれ。秋田県拠点。

永沢碧衣は、主に東北の狩猟・マタギ文化に関わり、自らも狩猟免許を取得。狩猟者としての経験を重ねていくことで出会う種々のもののとの関係性を記録・表現した絵画作品を制作している。巨視と微視を行き来することで「人と生物と自然」の相関を問い、それらの境界線を溶解し消化することが創作の原動である。解体した熊から膠を抽出したり、切り株をキャンパスに見立てたり、石から絵の具を採取するなど、素材としてもモチーフとしても、日々山と向き合いながらフィールドワークを重ね、生命の根源や循環、記憶の痕跡を辿る旅を続けている。

主な発表歴

- 2024 「アケヤマ 秋山郷立大赤沢小学校」大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024(新潟)
- 2024 「弘前エクステンション #06 白神観見亭」弘前れんが倉庫美術館(青森)
- 2023 「Material, or」21_21 DESIGN SIGHT(東京)
- 2023 「シン・ジャパニーズ・ペインティング 革新の日本画―横山大観、杉山寧から現代の作家まで」ポーラ美術館(神奈川)
- 2021 個展「霧中の山に抱かれて」北秋田市阿仁公民館(秋田)



《背負う者》2018

ダラ・ナセル

Dala Nasser

1990年スール(レバノン)生まれ。ベイルート(レバノン)拠点。

多様な素材を用いて、抽象概念とオルタナティブなイメージを表現する芸術家、ダラ・ナセルは絵画、パフォーマンス、そして映画などのジャンルを横断した作品を手掛ける。ナセルの作品は、資本主義と植民地主義的な搾取の結果として悪化していく環境、歴史、政治的な状況に、人間と人間以外のものがどのように関わり合っているかを探求する。ナセルは、伝統的な風景画の広大な視点とは対照的に、土地をインデックス的に捉えた絵画で、政治や環境における侵食に焦点を当てる。彼女は自らの作品を通して、人間の言葉が届かない中で環境がゆっくりと侵され、侵略せし者が搾取を行い、インフラが崩壊する様子を、人間以外のものの視点から表現する。

主な発表歴

- 2024 ホイットニー・ビエンナーレ2024「Even Better than the Real Thing」ホイットニー美術館(ニューヨーク、米国)
- 2023 個展「Adonis River」ルネサンス協会(シカゴ、米国)
- 2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2022 第58回カーネギー・インターナショナル、カーネギー美術館(ピッツバーグ、米国)
- 2022 個展「Red in Tooth」ケルン美術協会(ドイツ)



《Adonis River》2023

小川待子

Ogawa Machiko

1946年北海道生まれ。東京都拠点。

東京芸術大学工芸科を卒業後、1970年からパリ国立高等工芸学校を経た後、人類学者の夫の調査助手として西アフリカ各地で3年半を過ごし、現地の土器づくりの技法を学ぶ。パリ滞在中に鉱物博物館で、鉱物の美しさの中に「かたちはすでに在る」という考え方を見だし、ゆがみ、ひびや欠け、釉薬の滲れなどの性質を活かし、つくることと壊れることの両義性を内包する「うつわ」として、始原的な力を宿す作品を制作している。

主な発表歴

- 2024 「鉱脈」思文閣(京都)
- 2023 「Shiriyu Morita, Machiko Ogawa」ギャラリー・フランク・エルバズ(パリ、フランス)
- 2023 「エマイユと身体」銀座メゾンエルメスフォーラム(東京)
- 2022 「Toucher le Feu」国立ギメ東洋美術館(パリ、フランス)
- 2019 《握りだされたとき》(コミッション・ワーク)カタル国立美術館(ドーハ)



《結晶と記憶：五つの山》2020
Photo: Tadayuki Minamoto
Courtesy of Shibunkaku

大小島真木

Ohkojima Maki

2023年東京都で結成。東京都拠点。

大小島真木、1987年東京都生まれ。／辻陽介、1983年東京都生まれ。

大小島真木は、「絡まり、もつれ、ほころびながら、いびつに循環していく生命」をテーマに制作活動を行うアーティスト。これまでにインド、ポーランド、中国、メキシコ、フランスなどで滞在制作を行う。2017年にはタラオセアン財団が率いる科学探査船タラ号太平洋プロジェクトに参加。2023年より辻陽介とアートユニットを形成し、「大小島真木」のユニット名義で活動している。近年は美術館、ギャラリーなどにおける展示の他、舞台美術なども手掛ける。

主な発表歴

2024 「美術館堆肥化宣言」青森県立美術館

2023-24 個展「千歳頭 CHIKATO」調布市文化会館たづくり(東京)

2022 個展「つくりかけラボ09: コレスポンダンス」千葉市美術館

2022 「地つづきの輪郭」セゾン現代美術館(長野)

2018-19 個展「L'œil de la Baleine/ 鯨の目」パリのアクアリウム(フランス)



《明日の収穫》2017-18

Photo: Mari Habaya

© Maki Ohkojima with Agros Art Project All Rights Reserved

青森県立美術館寄託

沖潤子

Oki Junko

1963年埼玉県生まれ。神奈川県拠点。

生命の痕跡を刻み込む作業として布に針目を重ねた作品を制作。下絵を描く事なしに直接布に刺していく独自の文様は、シンプルな技法でありながら「刺繍」という認識を裏切り、観る者の根源的な感覚を目覚めさせる。古い布や道具が経てきた時間、またその物語の積み重なり、彼女自身の時間の堆積をも刻み込み紡ぎ上げることで、新たな生と偶然性を孕んだ作品を生み出す。存在してきたすべてのもの、過ぎ去ったが確かにあった時間。いくつもの時間の層を重ねることで、違う風景を見つけることが制作の核にある。

主な発表歴

2022 個展「沖潤子 さらけでるもの」神奈川県立近代美術館鎌倉別館

2021 GO FOR KOGEI 2021「特別展I工芸的な美しさの行方」工芸、現代アート、アール・ブリュット」
那谷寺(石川)

2020 個展「anthology」山口県立萩美術館・浦上記念館

2017 個展「月と蝸」資生堂ギャラリー(東京)

2016 「コレクション展I Nous めう」金沢21世紀美術館(石川)



《anthology》2023

FUJII TEXTILE WEEK

Photo by Kenryou Gu

太田三郎

Ota Saburo

1884年愛知県生まれ。1969年東京都にて没。

愛知県西春日井郡(現在の清須市)に生まれ、上京して黒田清輝に洋画を、寺崎廣業に日本画を学んだ。第7回文展入選後、フランス留学を経て帝展審査員に就き、画壇に存在感を示した。戦後は中央とは距離を置き、1946年に中部日本美術協会を設立して委員長に就任。作家たちの発表の場を求める美術館建設運動を主導し、1955年の愛知県文化会館開館を機に美術科長の職に就いて、美術館運営の舵取りをしながら地域文化の発展に尽力した。和洋の絵画に加え挿画や文筆にも長け、広く美術を普及した人物でもある。



《東山動物園猛獣園遊覧画 No. 1》1948

名古屋市美術館蔵

主な活動歴

1913 「第7回文部省美術展覧会」竹之台陳列館(東京)

1933-34 帝国美術院展覧会審査員に就く

1946-50 中部日本美術協会委員長の職に就く

1955-60 愛知県文化会館美術科長の職に就く

2024 「清須ゆかりの作家 太田三郎 博学多彰の画家として」清須市はるひ美術館(愛知)

セルマ & ソフィアン・ウィスイ

Selma & Sofiane Ouissi

セルマ・ウィスイ、1975年チュニス(チュニジア)生まれ。チュニス(チュニジア)、パリ(フランス)拠点。/
ソフィアン・ウィスイ、1972年チュニス(チュニジア)生まれ。チュニス(チュニジア)拠点。

セルマ&ソフィアン・ウィスイのデュオは、振付家、ダンサー、キュレーターとしてキャリアの初期から共に創作およびパフォーマンスを行う、アラブ圏のコンテンポラリーダンス界における代表的な存在である。

両者は共同で、2007年にチュニスにアートプラットフォーム「L'Art Rue」を設立し、アーティストック・ディレクターとしてチュニジアにおける現代アート制作と普及、教育活動にも尽力している。また、地域社会と密接に関わるなかで、2007年からは社会的な問題や都市空間をテーマにした領域横断的な芸術祭「ドリーム・シティ」を共同で創設、以後共同ディレクターとしてフェスティバルを率いる。



{L'Art Rue Ceramic Dolls Collection, Created by Laroussa Artistic Collective for Community Spaces} 2011-2013
Photo: © Yosr Ayadi

主な発表歴

- 2024 『Bird』フェスティバル・ドートンヌ(パリ、フランス)
- 2023 『Bird』第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2020 『Wajdan』グッゲンハイム・アブダビ(アラブ首長国連邦)
- 2017 『Le moindre geste』49ノール6エストFrac ロレーヌ(メッス、フランス)
- 2014 『Les yeux d'Argos』テート・モダン(ロンドン、英国)

クリストドゥロス・パナヨトゥ

Christodoulos Panayiotou

1978年リマソール(キプロス)生まれ。リマソール(キプロス)拠点。

クリストドゥロス・パナヨトゥは、彫刻、絵画、インスタレーション、パフォーマンス、写真、映像など、幅広い媒体を駆使し、歴史と時間の視覚的および物質的記録のなかに潜むナラティブを明らかにする。ダンスを始めとする舞台芸術の実践や歴史と演劇人類学の研究を踏まえ、パナヨトゥはしばしば、身のまわりにある物など既存の素材の再文脈化や、パフォーマンスを用いた介入を含む表現を行う。



{MARCH, APRIL, NOVEMBER} Sylvia Kouvali での展示風景、2021
Photo: Lewis Ronald

主な発表歴

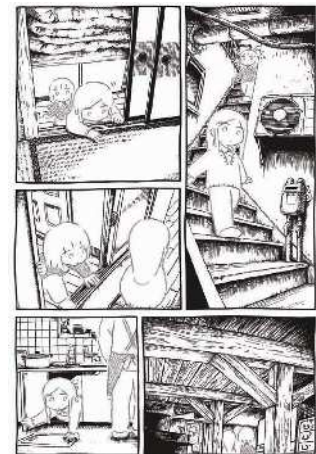
- 2023-24 個展「One Year」リュマ・アルル(フランス)
- 2019-20 個展「Act II: The Island」カムデン・アート・センター(ロンドン、英国)
- 2015 第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、キプロス館(イタリア)
- 2013 個展「Days and Ages」ストックホルム近代美術館(スウェーデン)
- 2013 個展「In The Light Of The Day The Fireflies Are Like Any Other Insect」CCA北九州(福岡)

panpanya

panpanya

生年・拠点都市非公表。神奈川県生まれ。

漫画家。2000年代よりウェブ上や同人誌即売会等で活動し、2013年、白泉社『楽園』にて商業デビュー。以降は同誌を中心に、主として短編作品を継続的に発表している。概ね年に一冊のペースで単行本が刊行されており、その装丁も全てpanpanya自身が手掛ける。2018年文化庁メディア芸術祭にて『二匹目の金魚』が第22回マンガ部門審査委員会推薦作品に選出。



「家の家」(7/8ページ)単行本『商店街のあゆみ』2022所収

主な刊行歴

- 2024 『そぞろ各地探訪 panpanya 旅行記集成』1月と7月
- 2023 『商店街のあゆみ』白泉社
- 2022 『模型の町』白泉社
- 2021 『魚社会』白泉社
- 2020 『おむすびの転がる町』白泉社

マイケル・ラコウィッツ

Michael Rakowitz

1973年ニューヨーク(米国)生まれ。シカゴ(米国)拠点。

マイケル・ラコウィッツは、問題の解決と発生が交差するような場において、多領域を横断しながら活動するアーティストである。植民地主義や地政学的対立など、さまざまな形での強制排除によって文化財や人々が居場所からの退去を強いられていることに着目し、日用品に新たな意味を与えたり型破りなアプローチを取り入れ、問題の周知を図る。2018年には、ハーブ・アルバート芸術賞を受賞し、ロンドンのトラファルガー広場の第4の台座に作品を展示する名誉を得た。2020年にはパブリック・アート・ダイアログ賞、およびナッシャー賞を受賞。現在、ハーグ市からの委嘱で、考古学と移民の流れをテーマとした公共プロジェクトを手掛けている。

主な発表歴

- 2021 「England's Creative Coast」ターナー・コンテンポラリー(マーゲート、英国)
- 2020 「Our World is Burning」パレ・ド・トーキョー(パリ、フランス)
- 2019-20 個展「Legatura imperfetta」ホワイテチャペル・ギャラリー(ロンドン、英国)／カステッロ・ディ・リヴォリ現代美術館(イタリア)／ジャミール・アートセンター(ドバイ、アラブ首長国連邦)
- 2019-20 個展「The Invisible Enemy Should Not Exist」マルメ市立美術館(スウェーデン)
- 2012 ドクメンタ13(カッセル、ドイツ)



《The invisible enemy should not exist (Lamassu of Nineveh)》2018
Photo: Gautier DeBlonde ©
Courtesy of the Mayor of London.

シルビア・リバス

Silvia Rivas

1957年ブエノスアイレス(アルゼンチン)生まれ。ブエノスアイレス(アルゼンチン)拠点。

シルビア・リバスは、映像インスタレーション、パフォーマンス、空間と関わるオブジェで知られ、アルゼンチンやラテンアメリカで領域横断的な表現を行うアーティストの草分けとして評価を得てきた。1990年代から隠喩的な可能性をもったさまざまな媒体や技術を取り入れ、時間の概念と人間が置かれている状況を探究してきた。リバスは、普遍的でありながら状況に依存するようなものを想起させることで、具体的な体験を通じた連想を促そうとする。リバスの考えでは、激動する状況に直面した人々にとって大きな力となるのは、まさにその瞬間の認識に根ざして粘り強く抵抗する姿勢なのである。彼女の作品は、映像がリアルなものであるという仮定に疑問を投げかけ、視聴覚に訴えかける物語の力を振り返り、その映像自体とその映像が参照しているものを疑う。数多くの美術館においてグループ展や個展を開催し、その作品は国内外の公立および私立コレクションに収蔵されている。



《Buzzing Dynamics》(ビデオ・スチル) 2010

主な発表歴

- 2024 個展「Cronotopias」ボゴタ近代美術館(コロンビア)
- 2010 個展「Zumbido, Contemporáneo 26」ブエノスアイレス・ラテンアメリカ芸術博物館(アルゼンチン)
- 2005 第5回メルコスール・ビエンナーレ「Direções no Novo Espaço」(ポルトアレグレ、ブラジル)
- 2004 個展「Everything from the outside」ブエノスアイレス現代美術館(アルゼンチン)
- 2003 第8回ハバナ・ビエンナーレ「Art with life」ウィフレド・ラム現代美術センター(キューバ)

西條茜

Saijo Akane

1989年兵庫県生まれ。京都府拠点。

西條茜は、陶磁器の表面がさまざまな質感で装飾される一方、内部には虚ろな空洞を孕むというギャップから「身体」との親和性を見出し、独自の陶造形を手掛けている。またパフォーマンスとともに陶造形に息や声を吹き込むサウンドパフォーマンスを行うほか、世界各地にある窯元などに滞在し、地元の伝説や史実に基づいた作品も制作している。

主な発表歴

- 2024 「コレクションズ・ラリー 愛知県美術館・愛知県陶磁美術館 共同企画」愛知県美術館
- 2023-24 「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」森美術館(東京)
- 2023 個展「やまの満ち引き」文化村クリエイション vol.3 なら歴史芸術文化村
- 2022 「第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ」(大賞受賞)丸亀市猿蓑弦一郎現代美術館(香川)
- 2019 第4回金沢・世界工芸トリエンナーレ「越境する工芸」金沢21世紀美術館(石川)



《集める》2022
Photo: Takeru Koroda
Courtesy of ARTCOURT Gallery
森美術館蔵

ハラーイル・サルキシアン

Hrair Sarkissian

1973年ダマスカス(シリア)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

ハラーイル・サルキシアンのキャリアは、ダマスカスにある父親の写真スタジオで始まり、今では同世代のコンセプチュアル・フォトグラファーたちを牽引する作家として評価されている。写真、映像、彫刻、サウンド、そしてインスタレーションと、さまざまな媒体を幅広く駆使するサルキシアンの作品は、時には瞑想に誘う夢のような風景を作り上げ、また時には死の風景にもなる。こうした作品は、画面の外に追いやられがちな「押し殺された声」が、しばし息を吹き返す場所でもある。サルキシアンは、ペイルートにあるアラブ・イメージ財団で諮問委員を務めている。

主な発表歴

- 2024 個展「The Presence of Absence」写真センター(コペンハーゲン、デンマーク)
- 2021-23 個展「The Other Side of Silence」ボンネファンテン博物館(マーストリヒト、オランダ) / ボニエギャラリー(ストックホルム、スウェーデン) / シャルジャ美術財団(アラブ首長国連邦)
- 2021 「The British Art Show 9」(英国)
- 2020 個展「FOCUS: Hrair Sarkissian」フォートワース現代美術館(米国)
- 2015 第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、アルメニア館(金獅子賞)(イタリア)



《Execution Squares》2008
Collection of Tate Modern.

佐々木類

Sasaki Rui

1984年高知県生まれ。石川県拠点。

身近にある自然や生活環境にインスピレーションを得ながら、主に保存や記録が可能な素材であるガラスを用い、自分が存在する場所で知覚した「微かな懐かしさ」の有り様を探索している。北欧やアメリカを中心に滞在制作に招聘され、国内外の美術館で展示活動を行う。主な賞歴は、第33回 Rakow Commission 2018(2019年、コニングガラス美術館、米国)、富山ガラス大賞展2021大賞(富山市ガラス美術館)。ラトビア国立美術館、金沢21世紀美術館(石川)など作品収蔵多数。ニューヨークタイムズ紙などで作家特集掲載。

主な発表歴

- 2024 「コレクション展1」金沢21世紀美術館(石川)
- 2024 個展「雪の中の青」アートコートギャラリー(大阪)
- 2023 個展「Subtle Intimacy: Here and There」ポートランド日本庭園(米国)
- 2021 GO FOR KOGEI 2021「特別展I工芸的な美しさの行方 工芸、現代アート、アール・ブリュット」郡谷寺(石川)
- 2013 瀬戸内国際芸術祭2013、栗島(香川)



《植物の記憶: Subtle Intimacy (2012-2022)》2022
Photo: Yasushi Ichikawa

バーシム・アル・シャーケル

Bassim Al Shaker

1986年バグダッド(イラク)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

バーシム・アル・シャーケルは、2013年のヴェネチア・ビエンナーレでイラク館代表のアーティストのひとりに選ばれて以来、自身のルーツやアイデンティティを伝え、イラクの近代史を振り返る作品を発表してきた。複数の絵で構成される作品《Four Minutes》が描いているのは、米国が2003年にイラクを侵攻した際、アル・シャーケルが目撃した爆発の光景である。爆発の直後に見えた空、大気、頭上を飛び交う瓦礫、完全なる静寂。一連の絵にインスピレーションを与えたのは、このトラウマ的な体験のほんの一部にすぎないが、彼は観客に「これらの絵が描いているのは死ではない。爆弾でもない。爆発のあとの刹那だ。すべての絵が新しい始まりを示唆している。死は存在するが、私は新たな人生を得た。私は、まだ生きている。」と語りかける。その絵から横溢するエネルギーには、逆境から回復する力と、生への感謝の念が見て取れる。幾層にも重ねられた豊かな色彩、激しく交差する筆致がキャンバスに息を吹き込んでいる。

主な発表歴

- 2024 アート・バーゼル・マイアミ、マイアミ・ビーチ・コンベンション・センター(米国)
- 2024 エキスポ・シカゴ、ネイビー・ピアーズ・フェスティバル・ホール(米国)
- 2023 個展「Four Minutes」ローナ・ホフマン・ギャラリー(シカゴ、米国)
- 2022 ドクメンタ15(カッセル、ドイツ)
- 2013 第55回ヴェネチア・ビエンナーレ、イラク館(イタリア)



《Sky Revolution》2023

ヤスミン・スミス

Yasmin Smith

1984年ダルグ・カントリー／シドニー(豪州)生まれ。ダルグ・カントリー／シドニー(豪州)拠点。

ヤスミン・スミスは陶芸と釉薬技術を駆使した彫刻による大規模なインスタレーションを制作し、徹底した現地調査、地域社会との協働、スタジオ制作を通して特定の土地を探索する。科学と芸術を融合し、釉薬の造形美を通して、生態系がもつ知性に形を与えている。スミスは、労働、採取主義、植民地化、政治生態学などについてのコンセプチュアルな調査を含む幅広い素材研究において、植物、灰、岩石、石炭、塩、自然土などの有機物や無機物を用いる。展覧会のため海外に長期滞在して、新作に取り組むこともある。作品の多くは豪州の公的機関に収蔵されている。ザ・コマースヤル(シドニー)での2022年制作の《FOREST》は、豪州各地の石炭火力発電所から採掘した石炭灰による釉薬に関する4年間の調査の成果であり、深い地質学的な時間軸を表現したものであった。

主な発表歴

- 2024 ラゴス・ビエンナーレ2024「REFUGE」タファワ・バレワ・スクエア(ナイジェリア)
- 2021-22 第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館|現代美術館(ブリスベン、豪州)
- 2020-21 「Rethinking Nature」マドレ・ド・ナレジーナ現代美術館(ナポリ、イタリア)
- 2019 「Cosmopolis #2: rethinking the human」ボンビドゥー・センター(パリ、フランス)
- 2018 第21回シドニー・ビエンナーレ「Superposition: Equilibrium and Engagement」(豪州)



《FOREST》2022
Photo: THE COMMERCIAL, SYDNEY
Courtesy of the artist and THE COMMERCIAL, SYDNEY.

杉本博司

Sugimoto Hiroshi

1948年東京都生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

杉本の活動分野は写真、建築、造園、彫刻、執筆、古美術蒐集、舞台芸術、書、作陶、料理と多岐にわたる。杉本のアートは歴史と存在の一過性をテーマとし、経験主義と形而上学の知見をもって西洋と東洋との狭間に観念の橋渡しをしようとする意図のもと、時間の性質、人間の知覚、意識の起源について探索。作品は、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)やボンビドゥー・センター(パリ)など世界有数の美術館に収蔵されている。代表作に『海景』、『劇場』、『建築』シリーズなど。2008年に建築設計事務所「新素材研究所」を、2009年に公益財団法人小田原文化財団を設立。2017年には文化施設「小田原文化財団 江之浦測候所」をオープン。2023年日本芸術院会員に任命される。2017年文化功労者(東京)に選出される。受賞歴としては、2017年王立写真協会賞(ロンドン)、2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ章(パリ)、2009年高松宮殿下記念世界文化賞[絵画部門](東京)など。

主な発表歴

- 2024 個展「Hiroshi Sugimoto: Time Machine」シドニー現代美術館(2024、豪州)／ユーレンス現代芸術センター(2024、北京、中国)／ヘイワード・ギャラリー(2023-24、ロンドン、英国)
- 2018-19 個展「SUGIMOTO VERSAILLES Surface of Revolution」ドリアノン、ヴェルサイユ宮殿(フランス)
- 2013 個展「杉本博司」サムスン美術館リウム(ソウル、韓国)
- 2006 個展「杉本博司: 時間の終わり」森美術館(東京)／ハーシュホーン美術館・彫刻庭園(2006、ワシントンD.C.、米国)
- 2000 個展「杉本博司: ポートレート」ドイツ・グッゲンハイム美術館(ベルリン)／ビルバオ・グッゲンハイム美術館(スペイン)／グッゲンハイム美術館ソーホー(2001、ニューヨーク、米国)



《シロクマ》1975
© Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi
作家蔵

富安由真

Tomiyasu Yuma

1983年広島県生まれ。東京都拠点。

富安由真は、心霊や超常現象、夢など不可視なものや科学では解明されていない事象を手掛かりに、現実と非現実の境目を探る作品を制作する。近作では、視点の重なりや次元の行き来を観客に意識させるような大型の体験型インスタレーションを、絵画や立体、映像、サウンド、VR、演劇的な演出といったさまざまなメディアを駆使しながら表現してきた。富安は、画中国画などの絵画の持つ構造に強い関心があり、特に最近の作品では、入れ子構造を持つ絵画が重要なオブジェクトとなったインスタレーションを数多く発表している。現代社会において見過ごされがちな、不確かで曖昧なものを拾い上げ、観客がそのなかで次元の重なりや俯瞰的視度を体験できるような構造を模索している。

主な発表歴

- 2023 個展「影にのぞむ」原爆の図 丸木美術館(埼玉)
- 2022 瀬戸内国際芸術祭2022、豊島(香川)
- 2021-22 個展「アペルト15 富安由真 The Pale Horse」金沢21世紀美術館(石川)
- 2021 個展、KAAT EXHIBITION 2020「富安由真展 漂泊する幻影」KAAT 神奈川芸術劇場
- 2018 個展、第12回 shiseido art egg「富安由真展 くりかえしみるゆめ Obsessed With Dreams」資生堂ギャラリー(東京)



《The Doom》2021
Photo: 戸野正将
Courtesy of Art Front Gallery.

アドリアン・ビシャル・ロハス

Adrián Villar Rojas

1980年ロサリオ(アルゼンチン)生まれ。拠点を定めずに活動。

アドリアン・ビシャル・ロハスは、共同制作やコラボレーションによる長期的なプロジェクトを構想してきた。その大規模でサイト・スペシフィックなインスタレーションの数々は、堂々とした印象を与えるのと同時に、どこか脆さも感じられる。ビシャル・ロハスは、彫刻、ドローイング、ビデオ、執筆、行為や事象の痕跡などを組み合わせながら、すでに絶滅に遭ったか、絶滅に瀕して危険にさらされている人間の状態を研究し、過去、現在、未来が折り重なるポスト人新世代における、種間の境界線を探る。

主な発表歴

- 2022 個展「The End of Imagination」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館ザ・タンク(シドニー、豪州)／バス美術館(マイアミ、米国)
- 2017-18 個展「The Theater of Disappearance」ダフィン・コンテンポラリー・アット・MOCA(ロサンゼルス、米国)／メトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)／アテネ国立観測所ネオン(ギリシャ)／ブレゲンツ美術館(オーストリア)
- 2015 個展「ファンタズマ」ストックホルム近代美術館(スウェーデン)
- 2013 個展「Today We Reboot the Planet」サーペンタイン・ギャラリー(ロンドン、英国)
- 2012 ドクメンタ13(カッセル、ドイツ／カプル、アフガニスタン)



《Mi familia muerta (My Dead Family)》2009
Photo by Carla Barbero

山本作兵衛

Yamamoto Sakubei

1892年福岡県生まれ。1984年福岡県にて没。

九州・筑豊地方に生まれ、かぜの7歳ではじめて坑内に入ったのを皮切りに、各地の炭坑を転々と渡り歩いた。1955年に位登炭坑閉山により退職、夜間警備の仕事の傍らで、後世に炭坑の姿を伝えるため絵筆を取るようになる。以降、92歳で没するまでに描いた記録画は1,000点を超え、『明治大正炭坑絵巻』(1963年)、『画文集 炭鉱に生きる』(1967年)、『山本作兵衛画 文筑豊炭坑絵巻』(1973年)などの形で刊行されている。炭坑労働者の視点から描かれた生々しい臨場感を備えた記録画や日記等のうち697点が、2011年に人類が共有すべき歴史的な遺産として日本初のユネスコ「世界の記憶」に登録されている。

主な活動歴

- 1906 麻生山内炭坑(福岡県)に入坑
- 1955 長尾鉱業所位登炭坑(福岡県)の閉山で退職
- 1957 長尾鉱業所本事務所の夜警備員となり、仕事の傍らで絵筆を取る
- 1963 『明治大正炭坑絵巻』を刊行
- 2011 記録画、日記等697点が日本初のユネスコ「世界の記憶」に登録される



《低層炭 採り掘り》1973
© Yamamoto Family

ロバート・ザオ・レンフイ

Robert Zhao Renhui

1983年シンガポール生まれ。シンガポール拠点。

ロバート・ザオ・レンフイは、自然と文化の複雑で入り組んだ関係性を探求する領域横断的な実践を行うアーティスト。生物界を構成する多様な存在や物体に関心を寄せ、インスタレーションや写真、映像、彫刻を媒体として、その経験や知識が人間という集合的存在をいかに豊かにしているかを描き出している。



《Albizia》2023

主な発表歴

- 2024 インヴァートビエンナーレ vol.01「Multiple Future: a new visions of our life」イノヴァ美術館(廊坊、中国)
- 2024 第60回ヴェネチア・ビエンナーレ、シンガポール館(イタリア)
- 2023 第14回光州ビエンナーレ「soft and weak like water」(韓国)
- 2020 釜山ビエンナーレ2020「Words at an Exhibition, an exhibition in ten chapters and five poems」釜山現代美術館(韓国)
- 2019 シンガポール・ビエンナーレ2019「Every Step in the Right Direction」ギルマン・バラックス

パフォーミングアーツ

公演スケジュール

公演日／会場	アーティスト名	作品タイトル	
9月13日(土)～9月15日(月・祝) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	ブラック・グレース Black Grace	Paradise Rumour (パラダイス・ルーモア)	日本初演
9月13日(土)、9月14日(日) Live & Lounge Vio・CLUB MAGO(中区)	バゼル・アッバス&ルアン・アブ＝ラーメ Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme	タイトル未定	世界初演・新作
9月26日(金)～9月28日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	態変 TAIHEN	BRAIN (ブレイン)	世界初演・新作
10月3日(金)～10月5日(日) 瀬戸蔵つばきホール 10月12日(日)～10月13日(月・祝) 愛知県芸術劇場 大リハーサル室(B2F)	マユンキキ+ Mayunkiki+	クシテ	世界初演・新作
10月10日(金)～10月19日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	オル太 OLTA	Eternal Labor (エターナル・レイバー)	世界初演・新作
11月14日(金)～11月16日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	セルマ&ソフィアン・ウィスイ Selma & Sofiane Ouissi	Bird (バード)	日本初演
11月22日(土)～11月24日(月・振休) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	AKNプロジェクト AKN PROJECT	喜劇『人類館』	新演出
11月28日(金)～11月30日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)	フォスタン・リニエクラ Faustin Linyekula	My body, my archive (マイ ボディ・マイ アーカイブ)	日本初演
上演日調整中 愛知県陶磁美術館 芝生広場	クォン・ビョンジュン Kwon Byungjun	ゆっくり話して、そうすれば歌になるよ	世界初演・新作

◎パフォーミングアーツのチケットは7月12日(土)発売予定です。

バゼル・アッバス&ルアン・アブ＝ラーメ

Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme

バゼル・アッバス、1983年ニコシア(キプロス)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。
ルアン・アブ＝ラーメ、1983年ボストン(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。

バゼル・アッバスとルアン・アブ＝ラーメは、サウンド、映像、文章、インスタレーション、パフォーマンスなど、さまざまな分野で共に活動するアーティスト。二人の取り組みは、パフォーマンス、政治的イマジナリー、肉体、仮想世界の横断にある。二人のアプローチの特徴は、サウンド、映像、テキスト、オブジェなど、既存の素材や自作の素材をサンプリングし、それらを全く新しい「台本」に再構築することである。その成果として、マルチメディア・インスタレーションやサウンドと映像のライブ・パフォーマンスという形で、サウンド、映像、テキスト、サイトが持つ政治的、情緒的、物質的な可能性を追求する表現を展開している。今回は名古屋市内のクラブを貸し切り、今年パレスチナで撮影した映像と当地から招聘するミュージシャン等による新作のパフォーマンス・インスタレーションを発表する。



© The Museum of Modern Art, New York. Photo: Julieta Cervantes

主な発表歴

- 2024 個展「The song is the call, and the land is calling」コペンハーゲン・コンテンツボラリー / ニー・カールスベルグ・グリプトテク美術館 (デンマーク)
- 2024 個展「Only sounds that tremble through us」MIT リスト・ヴィジュアル・アーツ・センター (マサチューセッツ、米国)
- 2023 個展「An echo buried deep deep down but calling still」アストルップ・ファーンリ現代美術館 (オスロ、ノルウェー)
- 2022 個展「May Amnesia Never Kiss Us on the Mouth」ニューヨーク近代美術館 (米国) / ミグロ現代美術館 (チューリッヒ、スイス)

公演情報

タイトル未定

世界初演・新作

パフォーマンス: バゼル・アッバス&ルアン・アブ＝ラーメ、バラリ、ハイカル、
ジュルムッド 他

AKNプロジェクト

AKN PROJECT

2020年沖縄県で発足。沖縄県拠点。

1978年、『人類館』によって沖縄出身で初めて岸田戯曲賞を受賞した劇作家・知念正真(1941-2013年)。その作品を継承するため、娘の知念あかねが2020年に発足した「AKNプロジェクト」が、「戦後」80年を迎える今年、『人類館』を喜劇として同時代に応答した新たなアプローチで演出する。1976年に初演された『人類館』は、1903年の「人類館事件」を起点に、皇民化教育、沖縄戦、米軍統治、本土「復帰」を織り込み、沖縄を巡る歴史を鋭く風刺した記念碑的作品である。いま「AKNプロジェクト」が本作に取り組むのは、「『人類館』の可能性が汲み尽くされておらず、現代に訴えるものがあるから」だという。知念正真が愛した「ごっこ遊び」と「ドンデン返し」に思いを馳せ、彼らはさらにこう続ける。「演劇に力があるとすれば、それは私たちの小さな「ごっこ遊び」が、強さと弱さの、無関心と苦しみ、ゲートの内側と外側の、国家の中心と周縁の、社会の固定された関係に「ドンデン返し」をもたらす可能性を示すときではないか」と。本作は、知念あかねが那覇文化芸術劇場なはへと挑戦する2度目のリ・クリエーション。ドラマトウルクになはへとから林立騎、共同演出に新垣七奈、舞台美術に佐々木文美を迎え、「喜劇」としての『人類館』に挑む。



イラスト: 大白小智

公演情報

喜劇『人類館』

新演出

作: 知念正真
演出: 知念あかね 新垣七奈
ドラマトウルク: 林立騎
舞台美術: 佐々木文美
衣装: 藤谷香子
出演: 井上あすか、神田青、仲嶺雄作

主な発表歴

- 2022 喜劇『人類館』那覇文化芸術劇場なはへと(沖縄)
- 2021 喜劇『人類館』オンライン配信

ブラック・グレース

Black Grace

1995年タマキ・マカウラウ／オークランド(アオテアロア／ニュージーランド)で結成。
タマキ・マカウラウ／オークランド(アオテアロア／ニュージーランド)拠点。

太平洋の島々や、アオテアロア(ニュージーランド)の先住民であるマオリ等にルーツを持つメンバーで構成されたダンスカンパニー。サモアルーツの創設者ニール・イエレミアは、1995年の設立以来ニュージーランドを代表する存在として、南太平洋の伝統的な踊りや儀式的な動きをコンテンポラリーダンスと融合させた独自のスタイルで国際的に高く評価されている。来日公演は2005年以来20年ぶり。今回は、2023年の第15回シャルジャ・ピエンナーレにおける世界初演後、ハリス・シアター(シカゴ)をはじめとする米国ツアーや、セント・ジェームズ・シアター(ウェリントン)ほか各地で好評を博した『Paradise Rumour(パラダイス・ルーマー)』を上演する。

太平洋の島々に投影された『パラダイス(理想郷)』という幻想と、南太平洋地域において差別や偏見に晒されるさまざまな移民コミュニティが直面した現実(ごまかし、救済)との対比をテーマに、本作は、西洋の宣教師たちが初めて島々に足を踏み入れた時代から現代に至るまでの、個人と共同体の記憶を交差させながら描き出す。希望と抵抗、悲しみと受容、抑圧と解放、信仰と危機といった複雑な感情の交錯を、4人のダンサーが力強く、躍動感に満ちた動きで表現する。

いまだ世界各地で続く移民や先住民への差別的言説に対し、『Paradise Rumour』は過去と現在の旅の中で問いかける。「あれから、私たちはどこまで前進したのか?」と。



『Paradise Rumour』2023
Photo: Toaki Okano

主な発表歴

- 2023 『Paradise Rumour』第15回シャルジャ・ピエンナーレ
「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2022 「O Le Olaga - Life」ジェイコブズ・ピロウ・ダンスフェスティバル2022
(マサチューセッツ、米国)
- 2018 「Crying Men」ASB ウォーターフロントシアター(オークランド、ニュージーランド)
- 2016 「As Night Falls」ヘラルド・シアター(オークランド、ニュージーランド)
- 2012 「Vaka」第9回釜山ダンスフェスティバル(韓国)

公演情報

『Paradise Rumour (パラダイス・ルーマー)』

日本初演

演出・振付:ニール・イエレミア

フォスタン・リニエクラ

Faustin Linyekula

1974年キサンガニ(コンゴ民主共和国)生まれ。キサンガニ(コンゴ民主共和国)拠点。

フォスタン・リニエクラは、コンゴ民主共和国出身の振付家・演出家・ダンサー。「身体」を生きたアーカイブと捉え、歴史の暴力性と、それが個人や共同体の記憶に与える影響を問いかける。

リニエクラの作品は、テート・モダン、ニューヨーク・ライブアーツ、ニュージーランド・フェスティバル、シャルジャ・ピエンナーレ、アヴィニョン演劇祭など、世界各地で上演されている。

ヨーロッパによる植民地支配以前、コンゴの人々は仮面や彫刻、歌、物語といった手法を通じて、生活の記憶を独自にアーカイブしていた。だが、その多くは植民地主義とともに破壊されたり、世界中に散逸したりしていった。

『My body, my archive』では、征服者によって築かれた記録に抵抗し、断片化された歴史と記憶を繋ぎ直すことで、人々が自らのアーカイブを再構築する可能性を探る。サン・ラ・アーケストラのメンバーでもあるヘル・シャバカ=ラのトランペットが、身体に刻まれた記憶を呼び覚まし、過去の傷跡、歴史の重み、そして未来の兆しを浮かび上がらせる。



『My body, my archive』2023
Photo: Sarah Imsand

主な発表歴

- 2023 『My body, my archive』(舞台バージョン)ローザンヌ・ヴィディ劇場(スイス)
- 2020 『My body, my archive』(インсталレーション・パフォーマンス)テート・モダン(ロンドン、英国)
- 2019 「Histoire(s) du théâtre II」アヴィニョン演劇祭(フランス)
- 2019 「Congo」王立フランドル劇場(ブリュッセル、ベルギー)
- 2017 「Banataba」メトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)

公演情報

『My body, my archive (マイ ボディ・マイ アーカイブ)』

振付、ダンス:フォスタン・リニエクラ
音楽(トランペット):ヘル・シャバカ=ラ
彫刻:グバガ

日本初演

マユンキキ+

Mayunkiki+

2025年日本で結成。拠点を定めずに活動。

マユンキキは、北海道出身の音楽家・現代美術家。日本の先住民族として自身のルーツを深く見つめ創作する彼女は、「アイヌだから起こる出来事」を出発点に、あくまで「個人」としての視点を貫き、現代に生きるアイヌの存在と向き合い続ける。本上演に向けて結成した新ユニット「マユンキキ+」は、アイヌ伝統歌を基軸に活動する姉レクボとのユニット「アベトウンベ」、廣瀬拓音との実験的音響ユニット「西瓜兄妹」、アイヌ影絵のコラボレーター「hoshifune」の小谷野哲郎、わたなべなおか、音響設計には「WHITELIGHT」を迎えた特別編成。彼らとともに愛知県奥三河の天竜川流域や北海道石狩川上流域でのリサーチを重ねた本作は、アベトウンベ姉妹の祖父であり、昭和初期、日本の鉄道敷設史上最大の難所の一つと言われた奥三河の三信鉄道(現 JR 飯田線「天竜峡駅～三河川合駅(愛知県新城市)」)の開通に大きな功績を残した測量士、そして旭川アイヌのリーダーである川村カ子トの軌跡をたぐり寄せながら創作する。タイトルの「クシテ / kuste」とはアイヌ語で「(場所に)～を通らせる」という意味の他動詞。川村の足跡を辿りながら、本作は「以前」と「以後」、「上流」と「下流」、「先祖」と「子孫」など、我々が本来不可逆であると認識している大きな流れに橋をかけ、穴を穿ち、道を通す試み。

主な発表歴

2024 SUKIYAKI MEETS THE WORLD 2024 (富山) / SUKIYAKI TOKYO (東京)

Mayunkiki & Surge *1

2024 『ウコウタ』札幌国際芸術祭2024 (北海道) マレウレウ × KOMAKUS *2

2023/2024 『ノチウコタン』ウボボイ (北海道) hoshifune × アベトウンベ

2023 山谷音楽祭2023 (花蓮、台湾) 西瓜兄妹

2022 マユンキキ個展「SIKNURE - Let me live」

オープニングパフォーマンス (バーミンガム、英国) Mayunkiki & Surge

2022 音楽堂のピクニック (神奈川) hoshifune × アベトウンベ

*1 西瓜兄妹が英国で結成したバンド *2 WHITELIGHTから派生したアーティスト



© 広瀬しづ子

公演情報

『クシテ』

世界初演・新作

アベトウンベ(レクボ、マユンキキ)

西瓜兄妹(廣瀬拓音、マユンキキ)

hoshifune (小谷野哲郎、わたなべなおか)

WHITELIGHT 他

オル太

OLTA

2009年神奈川県で結成。東京都拠点。

2009年に結成されたアーティスト・コレクティブ。農耕からインスタレーションまでを射程とした耕作／制作では、共同体や儀式、民間伝承、歴史的な出来事、土地／空間の固有性を再解釈しながら、現代における集団のあり方やアイデンティティを問う。特に、社会の中で周縁化された存在や、見過ごされがちな労働、歴史、慣習をフィールドワークを通じて掘り下げ、台詞、美術、人、空間、光、音、映像等の要素を緻密に織り込んで、舞台と美術の制度をかいぐりするようなパフォーマンス作品が特徴的である。メンバーは井上徹、斎藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chiの5名。近年では国内外の芸術祭、劇場、美術館で横断的な作品発表を重ね、観客を巻き込みながら、現在と過去、リアルと虚構、性差、国などの境界線を、反逆的遊びをもって揺さぶるような体験を生み出している。

今回は、「女性」や「労働」をキーワードに、九州北岸、対馬海峡、朝鮮半島での滞在を経て、劇場空間をダイナミックかつ遊動的に活用した新作を発表する。



© OLTA

主な発表歴

2023 『ニッポン・イデオロギー』横浜国際舞台芸術ミーティング2023、

BankART Station (神奈川) / ロームシアター京都

2020 『超衆芸術 スタンドプレー』ロームシアター京都

2016 釜山ビエンナーレ2016「Hybridizing Earth, Discussing Multitude」(韓国)

2014 第16回ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル(韓国)

2013 「内臓感覚—遠くで近き生ノ声」金沢21世紀美術館(石川)

公演情報

『Eternal Labor (エターナル・レイバー)』

世界初演・新作

脚本:メグ忍者

演出:Jang-Chi

出演:井上徹、斎藤隆文、メグ忍者 他

舞台設計:長谷川義朗

セルマ&ソフィアン・ウイスイ

Selma & Sofiane Ouissi

セルマ・ウイスイ、1975年チュニス(チュニジア)生まれ。チュニス(チュニジア)、パリ(フランス)拠点。
／ソフィアン・ウイスイ、1972年チュニス(チュニジア)生まれ。チュニス(チュニジア)拠点。

チュニジア出身のセルマ・ウイスイとソフィアン・ウイスイによる『Bird』は、ある日、ウイスイ兄妹が廃墟となった元映画館を棲み処とする鳩と出会ったことから着想を得た作品。その時、かつて人とその物語のために存在した空間が、他の生き物の聖域へと変化した現象を目の当たりにし、パンデミックの隔離経験を経た私たちが、どうすれば再び自然と共生できるのか?という切実な問いが生まれたという。舞台上では、ダンサーと鳩が同じ空間を共有し、互いの存在を尊重しながら身体による予測不能な対話を紡ぐ。ウイスイ兄妹は、これまで振付や映像、インスタレーションなど多様なメディアを横断しながら、身体や記憶、社会的関係性をテーマにした作品を発表。2007年には、アートを通じた社会変革を目指すプラットフォーム『L'Art Rue』を共同設立。さらにチュニジア共和国の首都チュニスでは、共同ディレクターとして領域横断的な芸術祭「ドリーム・シティ」を創設し、アラブ諸国や北アフリカのアートシーンを牽引する存在として注目を集める。

本作は、2023年の第15回シャルジャ・ビエンナーレで発表され、フェスティバル・ドートンヌ、カナル・ボンビッドゥセンター(ブリュッセル)などで上演。その詩的で繊細な表現は、世界各地で「共に生きること」の本質を問い直してきた。都市空間のあちこちに根づく生命である鳩と人間が交差する本作に立ち会うとき、私たち人間は自らを特権的な存在とせず生き物との新たな関わりを見出すことができるのか?人間中心の視点を超え、偶発的で不確かな存在との新たな関係を切り開く。

主な発表歴

- 2024 『Bird』フェスティバル・ドートンヌ(パリ、フランス)
- 2023 『Bird』第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
- 2020 《Wajdan》グッゲンハイム・アプダビ(アラブ首長国連邦)
- 2017 『Le moindre geste』49ノール6エストFrac コレーヌ(メッス、フランス)
- 2014 『Les yeux d'Argos』テート・モダン(ロンドン、英国)



『Bird』2023
Photo: Pol Guillard

公演情報

『Bird (バード)』

日本初演

演出:セルマ&ソフィアン・ウイスイ

出演:ソフィアン・ウイスイ、ジヘッド・クミリ、鳩

態変

TAIHEN

1983年大阪府で結成。大阪府拠点。

「態変(たいへん)」は、1983年に主宰の金満里(きむ まんり)により大阪で創設されたパフォーマンス集団。メンバー全員が身体障がい者であり、その「歪んだ」とされる身体、「ぶざま」とされる床に這いつくばる動きにこそ価値をおき、一貫して障がいのある身体のあり方の探求を続ける。その表現は、直立二足歩行の身体によって作り上げられてきた既存の芸術観と、それに付随するあらゆる社会規範やバイアスへの抵抗であり、「醜」とは?「美」とは?と、観るものの美意識や価値観を強く揺さぶってきた。このような比類なき身体性は、伝説的舞蹈家のひとり、故・大野一雄からの多大な支持を受けたほか、文学や哲学、社会学、アクティビズム等の多方面に影響を与えている。

今回「態変」は、脳の司令に従えず制御から外れてしまう障がい者の身体をもって、正面から「脳」に向き合う。人工知能(AI)が我々の生活の隅々にまで影響を及ぼしつつある社会状況への応答として、身体と脳とのねじれ・もつれた関係性の来歴を描き出す試みである。さらに身体そのものへの深い関心を持ち、AI技術を活用したインスタレーションやライブパフォーマンスを創作する時里充をコラボレーターに迎え、現代社会において、いかに私たちの存在性(生命)への尊厳は保たれるのかを問う新作に挑戦する。

主な発表歴

- 2023 『私たちはアフリカからやってきた』ABCホール(大阪)
- 2022 『白牡丹の歌』AI HALL(兵庫)
- 2021 『さ迷える愛・序破急』横浜国際舞台芸術ミーティング2021(神奈川)
- 2006 『マハラバ伝説』テアター・デア・ヴェルト2005(シュトゥットガルト、ドイツ)
- 1997 『DEPARTED SOUL』第11回ベルン国際舞踏祭(スイス)



Photo: Hikaru Toda
Visual image: Mitsuru Tokisato

公演情報

『BRAIN (ブレイン)』

世界初演・新作

作・演出: 金満里

システムアーキテクト: 時里充

クオン・ビョンジュン

Kwon Byungjun

1971年ソウル(韓国)生まれ。ソウル(韓国)拠点。

クオン・ビョンジュンは1990年代にシンガーソングライターとして活動を開始し、映画や舞台音楽も手がけるなど多分野で活躍。2000年代末にオランダに渡り、音楽とテクノロジーに特化した研究・制作施設 STEIM で電子楽器の開発に従事。帰国後は音楽、演劇、美術を融合したニューメディア・パフォーマンスを展開し、アンビソニックス(没入型3Dオーディオシステム)を用いた音響インスタレーションの先駆者として注目される。2023年にはロボットを使った作品で Korea Artist Prize を受賞。

今回は、愛知県陶磁美術館の屋外に広がる自然環境に合わせて音で構築された架空世界を、ヘッドフォンを着用して散策するサウンドインスタレーションを発表する。本作のタイトルは、話し言葉をゆっくりと発することで、内面から自然に「歌」が生まれる過程を表している。制作の過程で瀬戸のやきものや、生活の痕跡を伝える民謡などをリサーチし、この地域の土、水、火、植生、まちや人々から音を採集。それらで構成する音の野外彫刻によって、仮想世界と自然が重なり合う。精密なGPSと立体音響技術により、観客の動きに応じて音が変化し、現実と仮想の境界が揺らぐ特別な体験を生み出す。



『From Cheongju To Kyiv』2022
Photo: National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea

主な発表歴

- 2023-24 「Korea Artist Prize 2023」国立現代美術館(ソウル、韓国)
- 2022 個展『"We Will Have a Serious Night" by Ghost Theater』
HongDong Reservoir(ソウル、韓国)
- 2021 個展『"We Will Have a Serious Night" by Ghost Theater』
南山谷韓屋村(ソウル、韓国)
- 2021 個展『Neverland Soundland: Kwon Byungjun - Sound Walk』
仁山市立美術館(韓国)
- 2020 個展『Club Golden Flower』Cosmo 40(仁川、韓国)

公演情報

『ゆっくり話して、そうすれば歌になるよ』 **世界初演・新作**

国際芸術祭「あいち2025」巡回展示「ポップ・アップ!」

参加アーティストのうち15組程度の作品が、県内4市町を巡回します。(入場無料)

10月24日(金)ー10月26日(日)

豊田市／豊田市民芸館



10月31日(金)ー11月3日(月・祝)

設楽町／旧設楽町立田峯小学校



11月7日(金)ー11月9日(日)

大府市／大府市歴史民俗資料館、大府市役所



11月14日(金)ー11月24日(月・振休)

豊川市／豊川市桜ヶ丘ミュージアム



会場別参加アーティスト一覧

アーティスト名	展示会場	公演会場
愛知芸術文化センター		
久保寛子	B2F フォーラムⅡ	
札幌彩子	B2F アートスペース X	
ムルヤナ	10F 愛知県美術館	
杉本博司	10F 愛知県美術館	
太田三郎	10F 愛知県美術館	
水谷清	10F 愛知県美術館	
宮本三郎	10F 愛知県美術館	
ウェンディー・ヒュバート	10F 愛知県美術館	
大小島真木	10F 愛知県美術館	
アフラ・アル・ダヘリ	10F 愛知県美術館	
諸星大二郎	10F 愛知県美術館	
山本作兵衛	10F 愛知県美術館	
川辺ナホ	10F 愛知県美術館	
ダラ・ナセル	10F 愛知県美術館	
パーシム・アル・シャーケル	10F 愛知県美術館	
ハラーイル・サルキシアン	10F 愛知県美術館	
小川待子	10F 愛知県美術館	
シルビア・リバス	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ブリヤギータ・ディア	8F 愛知県美術館ギャラリー	
浅野友理子	8F 愛知県美術館ギャラリー	
カマラ・イブラヒム・イシャグ	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ロバート・ザオ・レンファイ	8F 愛知県美術館ギャラリー	
クリストドゥロス・パナヨトゥ	8F 愛知県美術館ギャラリー	
マユンキキ	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ムハンマド・カゼム	8F 愛知県美術館ギャラリー	
イキバウィクルル	8F 愛知県美術館ギャラリー	
バゼル・アッバス & ルアン・アブ＝ラーム	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ソロモン・イノス	8F 愛知県美術館ギャラリー	
是恒さくら	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ジョン・アコムフラ	8F 愛知県美術館ギャラリー	
ミルナ・バーミア	2F 旧レストランススペース	
ブラック・グレース		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
態変		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
オル太		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
マユンキキ+		B2F 愛知県芸術劇場大リハーサル室
セルマ & ソフィアン・ウィスイ		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
AKNプロジェクト		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
フォスタン・リニエクラ		B1F 愛知県芸術劇場小ホール
[愛知芸術文化センター周辺]		
バゼル・アッバス & ルアン・アブ＝ラーム		Live & Lounge Vio・CLUB MAGO (中区)

愛知県陶磁美術館

エレナ・ダミアーニ	本館	
ワンゲシ・ムトゥ	本館、芝生広場	
マリリン・ポロル・ポール	本館	
ヤスミン・スミス	本館	
西條茜	本館	
シモーヌ・リー	本館	
シモーヌ・ファタル	本館	
チャヌーバ・ハンスカ・ルガー	本館	
永沢碧衣	本館	
Barrack(古畑大気+近藤佳那子)	レストラン	
ハイブ・アース	つくるとこ 陶芸館、芝生広場	
加藤泉	デザインあいち	
大小島真木	茶室「陶翠庵」	
クオン・ピョンジュン		芝生広場

瀬戸市のまちなか

佐々木類	旧日本鉱泉	
ミネルバ・クエバス	瀬戸市美術館	
シェイハ・アル・マズロー	瀬戸市美術館	
セルマ8ソフィアン・ウイスィ	瀬戸市新世紀工芸館	
メイサ・アブダラ	瀬戸市新世紀工芸館	
panpanya	瀬戸市のまちなか、松千代館	
富安由真	ポップアップショップ	
アドリアン・ビシャル・ロハス	旧瀬戸市立深川小学校	
ロバート・アンドリュウ	株式会社 加仙鉱山	
沖潤子	無風庵	
マイケル・ラコウィッツ	梅村商店	
マユンキキ+		瀬戸蔵つばきホール

ラーニング

コンセプト

国際芸術祭「あいち2025」のラーニング・プログラムは、誰もが安心して楽しめる環境づくりを目指します。「あいちトリエンナーレ2010」から15年にわたって芸術祭を支えてきた存在であるボランティアとともに、来場者も地域の方々も、それぞれの立場で積極的に参加できる仕組みづくりをミッションに掲げています。

チーム紹介

今回のラーニング・プログラムは、建築家、デザインリサーチャー、写真家、アートマネージャー、アーティストという多様な専門領域を持った5名のメンバーが企画・運営しています。本芸術祭のテーマを踏まえて議論を重ね、多様な人々が暮らす社会において、私たちはどのような学びと向き合うことができるのか、という課題について考え続けています。

異なる立場で実践を重ねてきた私たちはそれぞれの専門知識と経験を活かし、しばしば自分の経験や立場を省みながら、誰もが安心して楽しめる芸術祭を実現するために尽力していきます。



【左から】村上慧（アーティスト）、野田智子（アートマネージャー）、辻琢磨（建築家）、黒田菜月（写真家）、浅野翔（デザインリサーチャー）

拠点紹介

ラーニング・プログラムでは、来場者が芸術祭との関わりを多角的に増やせる場所として、愛知芸術文化センターと瀬戸市のまちなかに拠点を設けます。2つの拠点は、もともとその建物にあった家具等を活用しながら、来場者が休憩やおしゃべりなどにも気軽に利用できるような憩いの場として、また、レクチャーやワークショップなどのプログラムを実施する学びの場として環境づくりを行います。さらに、芸術祭を支えるボランティアの活動拠点としての役割も担い、来場者とボランティアの交流を深めることができる場として運営していきます。

ラーニングセンターへたち （愛知芸術文化センター8F）



「へたち」とは、建築等の文脈で、道路整備等により取り残された変わった形の土地を意味します。愛知芸術文化センターの吹き抜け空間に切り取られた「へたち」である展示室に、その特徴を活かしたラーニングセンターへたちを開設します。

ラーニングセンターせと （瀬戸市のまちなか）



ラーニングセンターせとを開設する旧小川陶器店は、かつては老舗の国内向け陶磁器卸売・小売店でした。センター内の什器には、もともと小川陶器店で陶器が並んでいた特徴的な棚を活用します。

ボランティアプログラム

「あいち2025」では、「あいちトリエンナーレ2010」から15年にわたって芸術祭を支えてきたボランティア活動をさらに深化させ、ボランティアとともに作り上げる芸術祭のカタチを目指しています。前回、「あいち2022」でも実施した会場運営のサポートと、来場者との対話型鑑賞形式によるツアーを継続するとともに、ボランティアが今まで以上に主体的に芸術祭に関われるように、「ラーニング」という活動を新設し、複数のテーマの下、集まったボランティア参加者とラーニングチームのメンバーと一緒にプログラムの企画立案から実施までを行います。



国際芸術祭「あいち2022」ボランティアによるガイドツアーの様子 撮影:ToLoLo studio

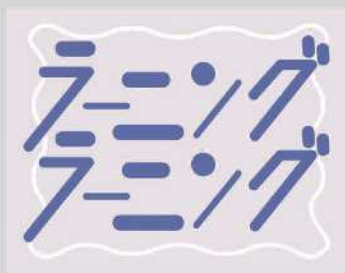


ラーニング専門研修のイメージ 撮影:藤井昌美

ラーニング・ラーニング

「ラーニング・ラーニング」とは、「ラーニングを学ぶ」ということをコンセプトとし、参加者一人一人が、自分たちの立っている場所をともに学ぶ・知る・気づく・対話することを重視する参加型プロジェクトです。

様々な専門家を招いたトークイベントに加えて、ディスカッションやワークショップなどのアクティビティを通じ、一人一人が芸術祭を通じた学びを、より身近に感じられる場を目指します。



「ラーニング・ラーニング」vol.01開催風景 撮影:三浦知也

アクセシビリティプログラム

視聴覚に障害のある方や小さなお子さんを連れた方など、様々な人々を対象にして、キュレーターやボランティアなどが、ツアーや鑑賞サポートを行います。また、子どもや、文章を読むことに困難のある方、日本語以外の言語を母語とする方も読みやすいような「やさしい」広報物の配布も行います。



国際芸術祭「あいち2022」ベビーカーツアーの様子 撮影:ToLoLo studio



国際芸術祭「あいち2022」筆談ツアーの様子 撮影:ToLoLo studio

学校向けプログラム

児童・生徒が国際色豊かな現代アートに触れ、楽しんでもらう機会とするため、教育機関と連携し、学校向け団体鑑賞プログラム(作品鑑賞ツアーや土を使ったアートプログラム等)を始めとした学校向けプログラムを実施します。



国際芸術祭「あいち2022」
学校向け団体鑑賞プログラムの様子
撮影:ToLoLo studio

瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」

土を叩いて固める「版築」という技法を用いて、参加アーティストのハイブ・アース(p.19)と協働し、版築と土をテーマにした構築物を愛知県陶磁美術館内に設置します。また、瀬戸の土を材料に小物などを制作するワークショップなどのイベントも実施予定です。



《Etsu'Dan Wall for Sharjah Architecture Triennial》
2023 Photo: Sharjah Architectural Triennial

連携事業

◆ 芸術大学連携プロジェクト

愛知県内4つの芸術大学(愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学)と連携したプロジェクトを「アートラボあいち」で開催します。

アートラボあいちと四芸大による連続個展

本事業では、県内芸術大学とアートラボあいちがプロジェクトチームを組み、各大学を卒業・修了後10年以内の今後の活躍が期待されるアーティストを1名ずつ選出し、「あいち2025」の会期に合わせて4名のアーティストによる連続個展を開催します。

四芸大による展覧会

本事業では、各大学とアートラボあいちの主催により、大学ごとの特色を生かした展覧会を開催します。

名古屋造形大学	2025年7月中旬～8月上旬(予定)
名古屋学芸大学	2025年8月中旬～9月上旬(予定)
愛知県立芸術大学	2025年12月中旬～2026年1月上旬(予定)
名古屋芸術大学	2026年1月下旬～2月下旬(予定)



Photo by Tanizawa Yosuke

アートラボあいち | 国際芸術祭「あいち」及び現代アート等に関する情報発信拠点

名古屋市中区丸の内三丁目4-13 愛知県庁大津橋分室2～3階
aichitriennale.jp/ala/ TEL: 052-961-6633

◆ 連携企画プログラム

国際芸術祭「あいち2025」と同時期に主に愛知県内で開催される、芸術祭のテーマや企画等と連携した内容で実施されるプログラムを「連携企画プログラム」とし、相互に広報展開・割引を図ります。

期間	事業名	会場	主催
愛知県関係の連携企画プログラム			
3月25日(火)～9月25日(木)	愛知万博20周年記念事業 愛・地球博20祭	愛・地球博記念公園(長久手市)	愛知万博20周年記念事業実行委員会
4月1日(火)～2026年3月31日(火)	愛陶コレクション展「世界はやきものでできている」	愛知県陶磁美術館(瀬戸市)	愛知県陶磁美術館
9月11日(木)～15日(月・祝)	あいち国際女性映画祭2025(第30回)	ウィルあいち(名古屋市中村区)、ミッドランドスクエアシネマ(名古屋市中村区)	公益財団法人あいち男女共同参画財団、あいち国際女性映画祭2025運営委員会
10月4日(土)～10月19日(日)	アートと遊びと子どもをつなぐメディアプログラム2025 汗かくメディア	愛知県児童総合センター(愛・地球博記念公園内、長久手市)	愛知県児童総合センター(公益財団法人愛知公園協会)

期間	事業名	会場	主催
瀬戸市のまちなかの連携企画プログラム			
①7月19日(土) ②10月(予定)	国際芸術祭「あいち2025」の歩き方	①梅村商店(瀬戸市) ②未定 ※瀬戸市中心街を予定	土街人
9月6日(土)～2026年1月18日(日)	瀬戸蔵ミュージアム企画展 瀬戸焼 受け継がれる千年の技と美	瀬戸蔵ミュージアム(瀬戸市)	瀬戸蔵ミュージアム、 公益財団法人瀬戸市文化振興財団
9月13日(土)～11月30日(日)	瀬戸市制施行96周年記念 瀬戸市美術館特別企画展 瀬戸の原風景―陶都瀬戸の記憶を辿る―	瀬戸市美術館(瀬戸市)	瀬戸市美術館、 公益財団法人瀬戸市文化振興財団
9月13日(土)～10月13日(月・祝)	瀬戸陶芸協会展―瀬戸陶芸の今に触れる―	瀬戸信用金庫本店 ギャラリーひまわり(瀬戸市)	瀬戸陶芸協会
9月13日(土)～11月30日(日)	めぐる、みつげる、共につくる。 すえひろ商店街ミュージアム	せと末広町商店街(瀬戸市)	せと末広町商店街
9月27日(土)～10月26日(日)	瀬戸現代美術展2025	尾張東地方卸売市場(瀬戸市)	瀬戸現代美術展実行委員会／ Barrack(古畑大気+近藤佳那子)
10月4日(土)～11月30日(日)	アート×茶室 タネリ庵	タネリスタジオビルディング(瀬戸市)	タネリスタジオビルディング
10月11日(土)～11月30日(日)	瀬戸市新世紀工芸館企画展 (仮)あいちの陶芸・ガラス工芸教育機関学生選抜展	瀬戸市新世紀工芸館(瀬戸市)	瀬戸市新世紀工芸館、 公益財団法人瀬戸市文化振興財団
10月30日(木)～11月16日(日)	瀬戸ならではの現代アート展覧会 ～物語は続いていく～	せと銀座通り商店街・ CAFE8 GUESTHOUSE もやいや2階 (瀬戸市)	瀬戸現代アート倶楽部
「ポップ・アップ!」巡回展示地域の連携企画プログラム			
10月4日(土)～11月30日(日)	アンチ・アクション 彼女たち、それぞれの応答と挑戦	豊田市美術館(豊田市)	豊田市美術館、朝日新聞社
10月11日(土)～2026年1月12日(月・祝)	企画展「鈴木繁男 手と眼の創作」	豊田市民芸館(豊田市)	豊田市民芸館
10月14日(火)～10月26日(日)(予定)	とよたまちなか芸術祭2025 Stereo	旧豊田市近代の産業とくらし発見館、 喜楽亭ほか(豊田市)	公益財団法人豊田市文化振興財団、 豊田市
10月18日(土)～11月30日(日)	特別展「埴輪大相撲 豊川場所」	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	豊川市
11月1日(土)～12月7日(日)	アートオブリスト2025 渡邊英司展	大倉公園(大府市)	アートオブリスト実行委員会・大府市
その他の地域の連携企画プログラム			
6月28日(土)～9月28日(日)	伊藤慶二 祈・これから	岐阜県現代陶芸美術館 (岐阜県多治見市)	岐阜県現代陶芸美術館
10月25日(土)～2026年1月12日(月・祝)	タビオ・ヴィルカラ 世界の果て		
9月27日(土)～12月7日(日)	藤田嗣治 絵画と写真	名古屋美術館(名古屋市中区)	名古屋市教育委員会・名古屋美術館、 読売新聞社
10月4日(土)～10月26日(日)	旧林家住宅美術展「時とアートの交差点―結び―」	一言市尾西歴史民俗資料館別館 旧林家住宅(一言市)	一言市尾西歴史民俗資料館

◆ パートナーシップ・プログラム

国際芸術祭「あいち2025」と同時期に原則として愛知県内で開催される文化芸術プログラムを「パートナーシップ・プログラム」として募集し、相互に広報展開を図ります。

◆ 芸術祭等との連携

他の芸術祭や文化イベントと連携して、相互に広報展開を図ります。

期間	事業名	会場
5月23日(金)～5月25日(日)	森、道、市場2025	ラグーナビータ／ラグナシア(蒲郡市)
10月4日(土)、10月5日(日) 11月8日(土)、11月9日(日)	SOCIAL CASTLE MARKET 2025 SOCIAL TOWER MARKET 2025	名古屋城(名古屋市中区) オアシス21(名古屋市中区)

キービジュアル



このシンプルで豊かな詩を絵にする。
 私がまず考えたのは「薔薇はどこに咲くのだろう」という事でした。
 灰は理不尽な破壊や死の結果なのか？
 だとしたら薔薇は死者の国に咲くのかも。かもしれない。
 わたしは死者の国の住人として幽霊を描くことにしました。
 描いているうちに、死んでいるはずの幽霊たちが
 少し生き生きとしてきたような気がしました。
 “死者の国”と思っていたのはもしかしたら
 “生まれる前の者たちの国”なのかもしれない。
 それがこの絵です。

五十嵐大介 Igarashi Daisuke



1969年埼玉県生まれ。神奈川県鎌倉市。多摩美術大学美術学部絵画学科卒業後、1993年『月刊アフタヌーン』（講談社）で四季大賞を受賞し、漫画家としてデビュー。高い画力と繊細な筆致で、自然とそこに住まう生き物たちが混じり合う、どこか恐ろしくも美しい世界を描き出す。代表作に日韓で実写映画化された『リトル・フォレスト』（2002-05）、文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞受賞作『魔女』（2003-04）および『海獣の子供』（2006-11）などがある。現在は『BE・LOVE』（講談社）で『かまくらBAKE猫倶楽部』を連載中。挿絵や装画も多数手掛ける。

国際芸術祭
あいち
2025
灰と薔薇の
あいまに

Aichi Triennale 2025:
A Time Between
Ashes and Roses

国際芸術祭
あいち2025
灰と薔薇の
あいまに

国際芸術祭あいち2025
灰と薔薇のあいまに
Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses

国際芸術祭あいち2025
灰と薔薇のあいまに



国際芸術祭
あいち
2025
灰と薔薇の
あいまに

Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses



国際芸術祭
あいち2025
灰と薔薇の
あいまに

デザイン

伊藤敦志
Ito Atsushi (AIRS)

Webサイトディレクション

中本真生
Nakamoto Masaki

会場サインデザイン

阿部航太
Abe Kota

Webサイトデザイン

石井喜博
Ishii Yoshihiro

タイプセット／ロゴタイプ

岡田和奈佳
Okada Wanaka

加納大輔
Kano Daisuke

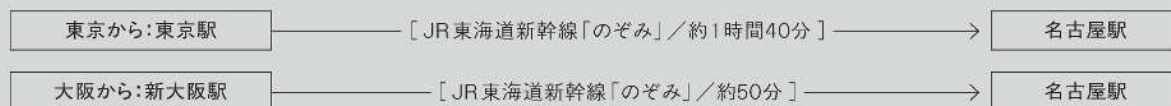
シンボルマーク

アリ・ムラード
Ali Mrad

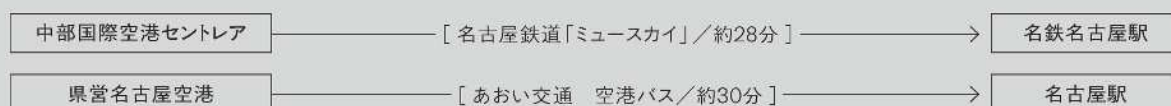
アクセス情報

愛知県(名古屋駅)までの主なアクセス

●電車

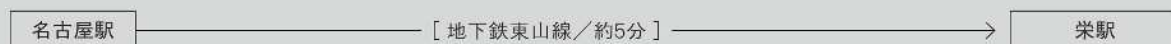


●飛行機



名古屋駅から各地区へのアクセス

●愛知芸術文化センター



●瀬戸市のまちなか



●愛知県陶磁美術館



栄(愛知芸術文化センター周辺)エリアから各地区へのアクセス

●瀬戸市のまちなか



●愛知県陶磁美術館



チケット情報

◆ 現代美術展チケット情報

チケットの種類と制度

フリーパス 会期中、各会場を何回でもご覧いただけます。

1DAYパス 入場当日に限り、各会場を何回でもご覧いただけます。

※会期中、一定料金(一般1,400円、学生900円)をお支払いいただくことで、「1DAYパス」から「フリーパス」へアップグレードができます。

券種		前売券 (6月3日～9月12日)	会期中販売券 (9月13日～11月30日)
フリーパス	一般	¥3,000	¥3,500
	学生(高校生以上)	¥2,000	¥2,300
1DAYパス	一般	¥1,800	¥2,100
	学生(高校生以上)	¥1,200	¥1,400

・中学生以下は無料です。障がい者手帳等をお持ちの方とその付添者1名は無料です。
 ・学生区分適用の場合、チケット確認時に学生証を提示していただく場合があります。
 ・学校向け団体鑑賞プログラムで来場される場合、学生及び引率者は無料です。(要事前申込)
 ・パフォーミングアーツについては、別途チケットが必要です。

チケットの販売場所

Peatix、teket、KKday、ART PASS、Boo-Wooチケット、ローソンチケット、チケットぴあ、セブンチケット、e+ (イープラス)、JTB

愛知芸術文化センター内など主要プレイガイド、オアシス21iセンター、コンビニエンスストア(セブンイレブン、ファミリーマート、ミニストップ、ローソン)等

※チケットの取扱い先は、今後も拡充を予定しています。

電子チケット

チケットをArtStickerで販売します。電子チケットは各会場で二次元コードを読み取ることで入場することができ、紙チケットへの引換が不要です。

※電子チケットで購入の場合、100円割引となります。

特別販売券

チケットを10万円分以上まとめて購入いただく場合、特別価格にて販売いたします。詳しくは特別販売券問合せ先までお問い合わせください。

現代美術展チケット問合せ先

国際芸術祭「あいち2025」チケット管理センター

TEL:052-950-3580 (6月3日～)

(10:00～18:00/土日祝日休み/会期中は無休)

※最新の情報及び詳細は、公式サイトをご覧ください。

特別販売券問合せ先

国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局

TEL:052-971-3111

(9:00～17:30/土日祝日休み/会期中は無休)

◆ パフォーミングアーツ チケット情報

パフォーミングアーツのチケットは7月12日(土)発売予定です。

問合せ先

国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局
(愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室内)
広報担当

〒461-8525
愛知県名古屋市中区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター内
TEL: 052-971-6182 (平日9時～17時)
E-MAIL: press@aichitriennale.jp

広報用画像貸出等プレス向けサイト: aichitriennale.jp/press/picture.html
公式サイト: aichitriennale.jp